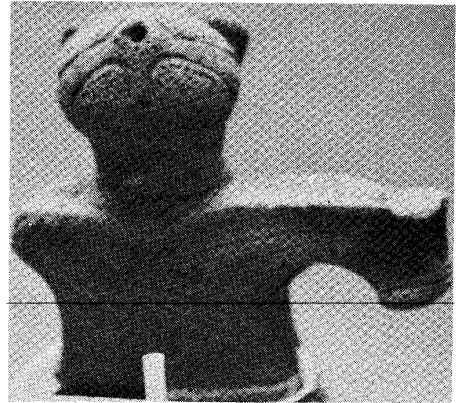




a

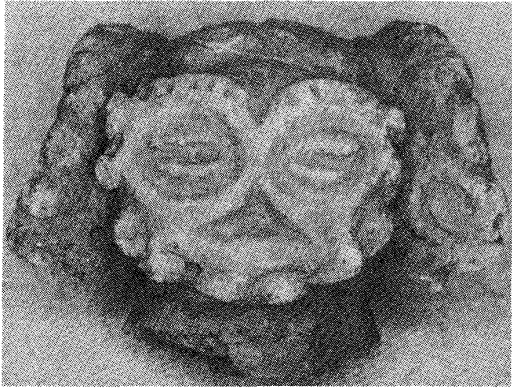


b

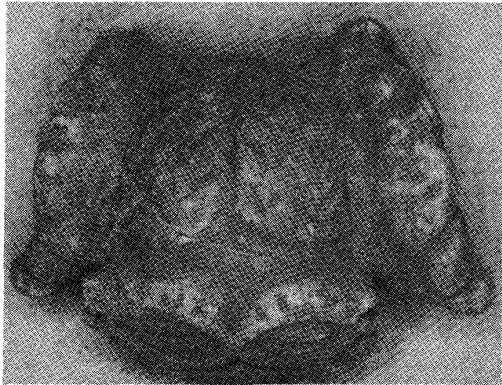


d

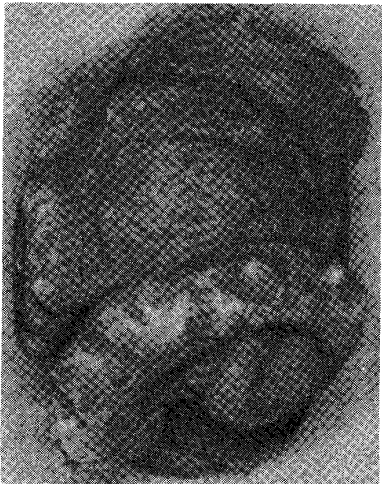
縄文後期中
長野県新町遺跡出土
(辰野町郷土美術館所蔵。
筆者撮影)



a



c



d

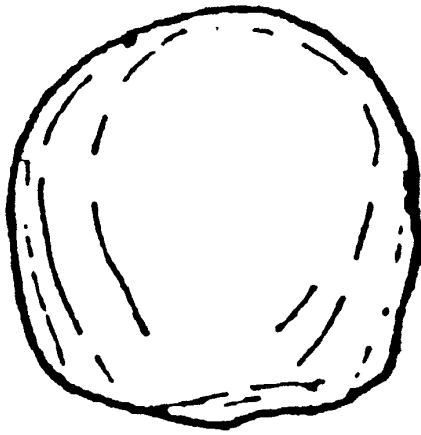
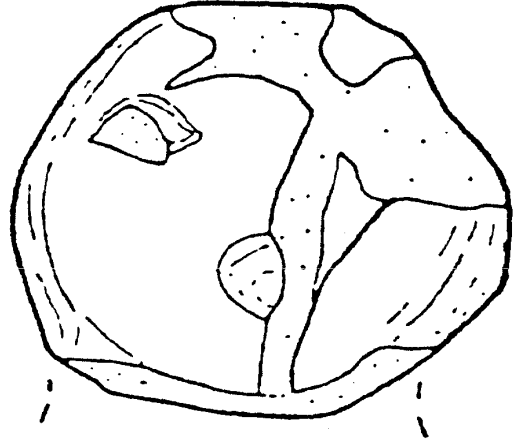
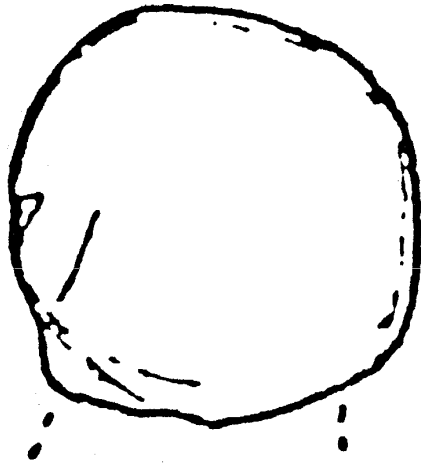
縄文晩期初 青森県三戸郡田子町
野面平出土 (慶応義塾大学所蔵。
筆者撮影)



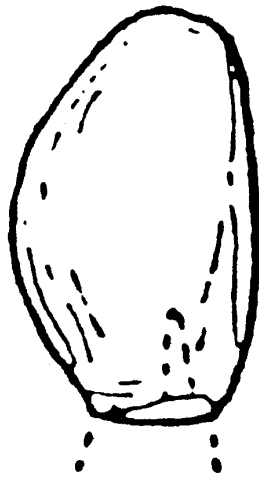
縄文後期 群馬県郷原遺跡出土
(『古代史発掘・土偶と信仰』
講談社)



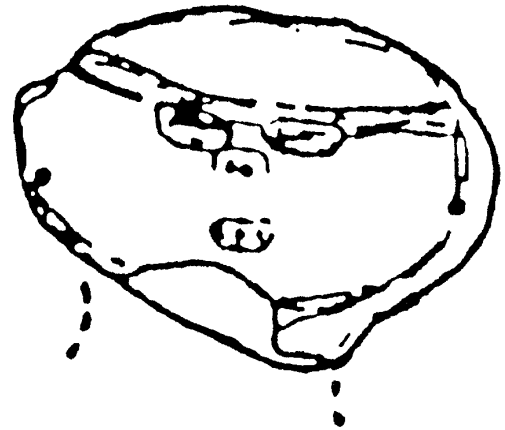
縄文後期 埼玉県真福寺貝塚出土
(『古代史発掘・土偶と信仰』講談社)



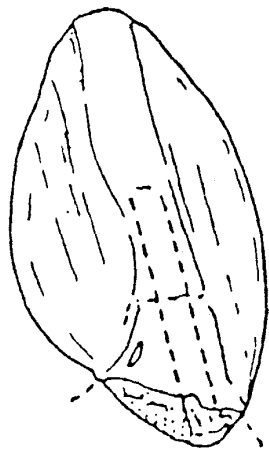
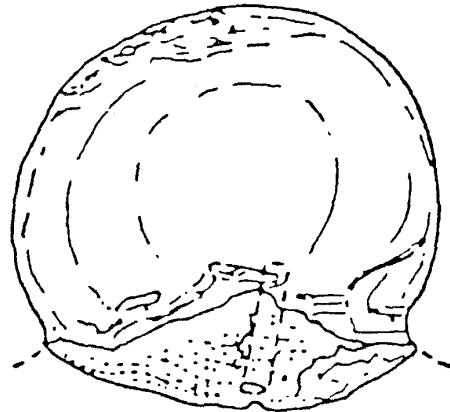
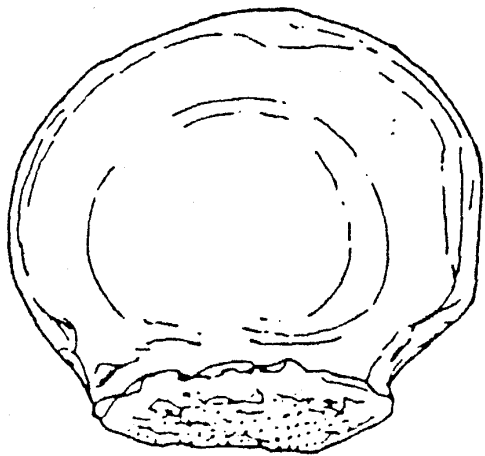
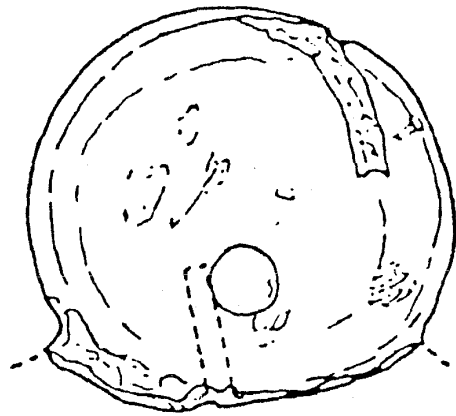
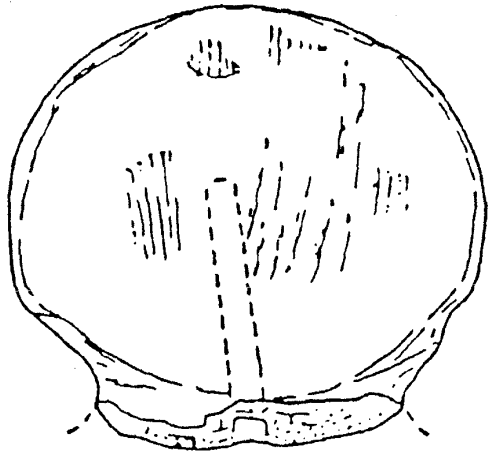
縄文後期
福岡県北古架遺跡出土。
宮内克巳「九州縄文時
代土偶の研究」
(九州考古学55号) 九
州考古学会1980



縄文後期
熊本県新南部遺跡出土
宮内克巳「九州縄文時代土偶の研究」
(九州考古学55号) 九州考古学会1980

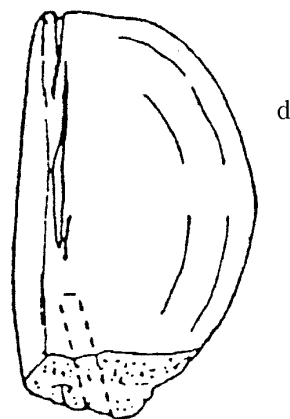
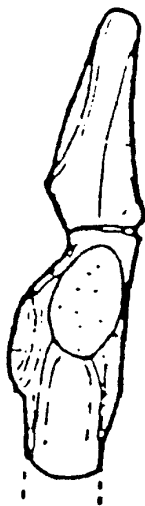
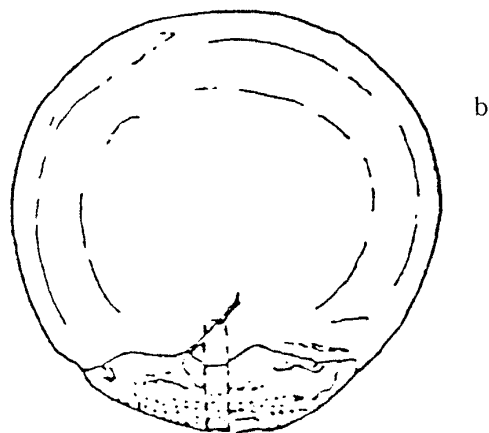
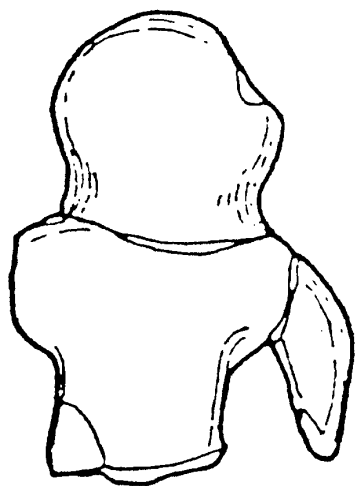
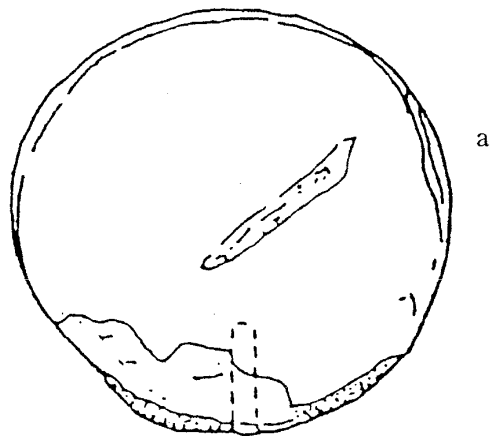
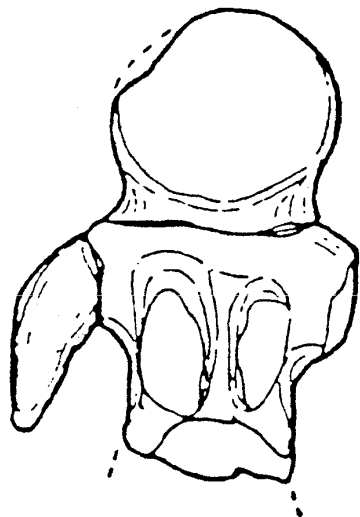


縄文後期 熊本県三万田遺跡出土
宮内克巳「九州縄文時代土偶の研究」
(九州考古学55号) 九州考古学会1980



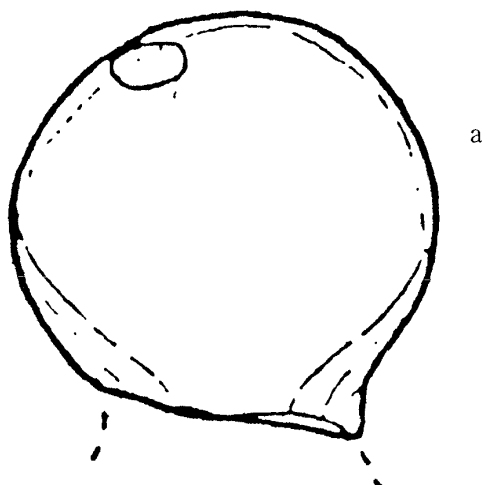
縄文後期
熊本県五丁中
原遺跡出土
上野辰男・富田紘一「上野辰男蒐集考
古学資料図録」1986

縄文後期
熊本県山海道
遺跡出土
上野辰男・富田紘一「上野辰男蒐
集考古資料図録」1986

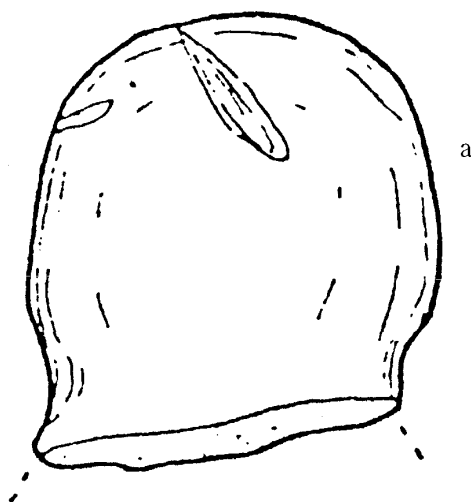


縄文後期
大分県石原貝塚
出土 宮内克巳
「九州縄文時代土偶の研究」
(九州考古学55号) 九州考
古学会1980

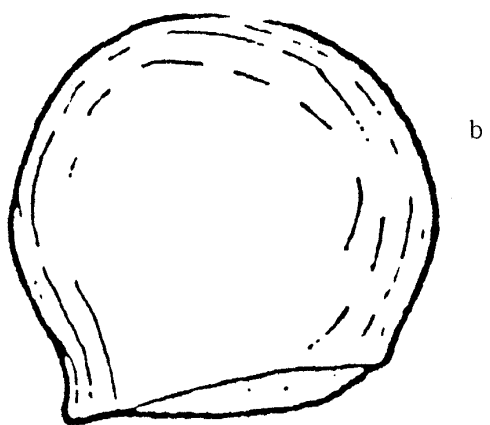
縄文後期 熊本県立田陣内遺跡
出土 上野辰男・富田紘一
「上野辰男蒐集考古学資料図録」
1986



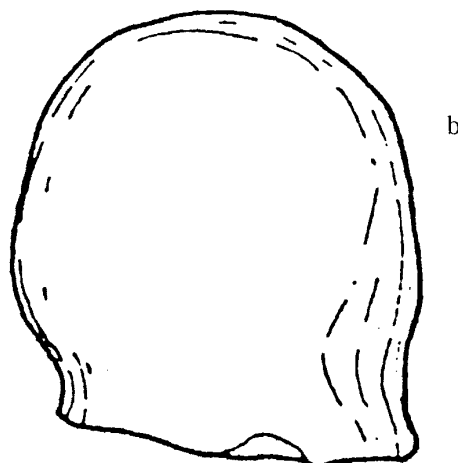
a



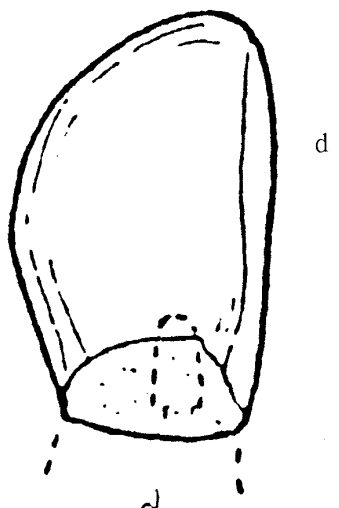
a



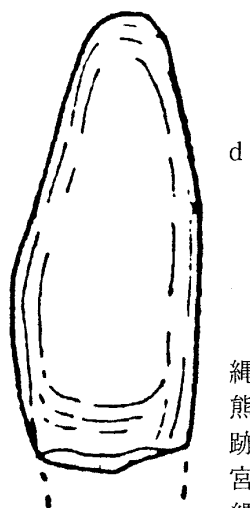
b



b



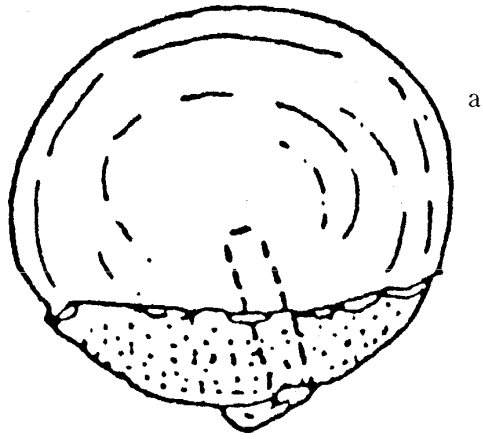
d



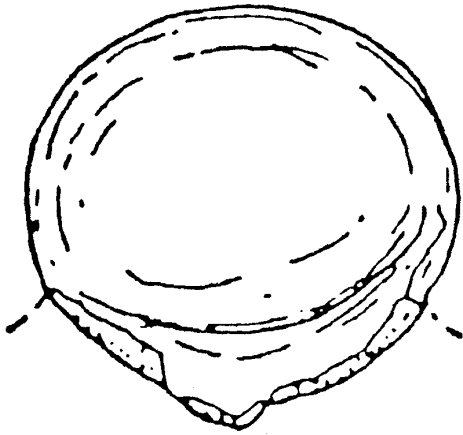
d

縄文後期 熊本県三万田遺跡出土
宮内克巳「九州縄文時代土偶の研究」
(九州考古学55号)九州考古学会1980

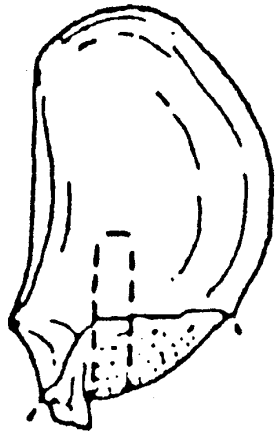
縄文後期
熊本県三万田遺跡出土
宮内克巳「九州
縄文時代土偶の
研究」(九州考古学55号)九
州考古学会1980



a

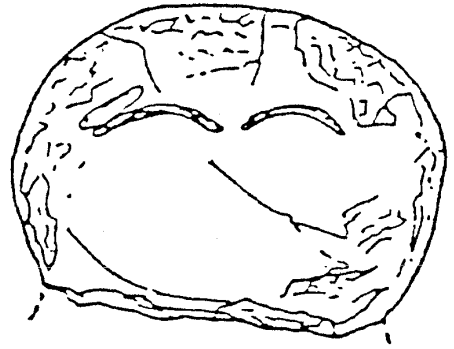


b

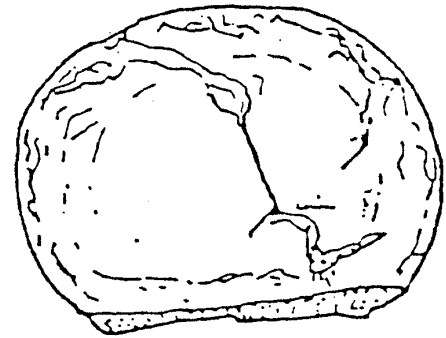


d

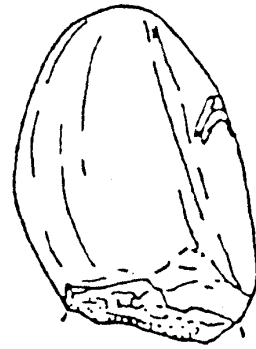
縄文後期
 熊本県五丁中原遺跡出土
 上野辰男・富田紘一
 「上野辰男蒐集考古学資料図録」1986



a

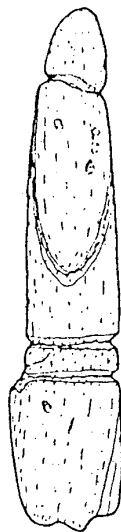


b

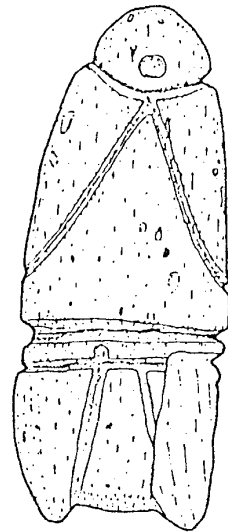


d

縄文後期 熊本県
 山海道遺跡出土
 上野辰男・富田紘一
 「上野辰男蒐集考
 古学資料」1986

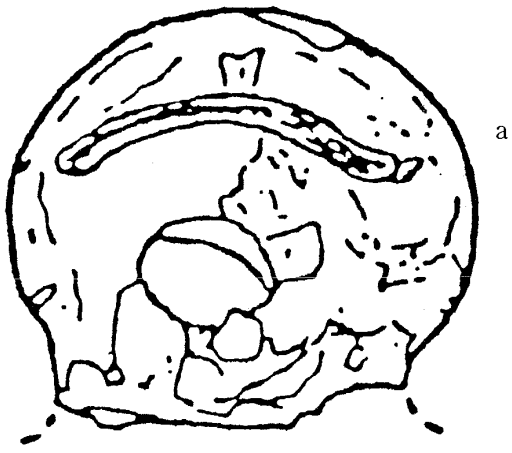


d

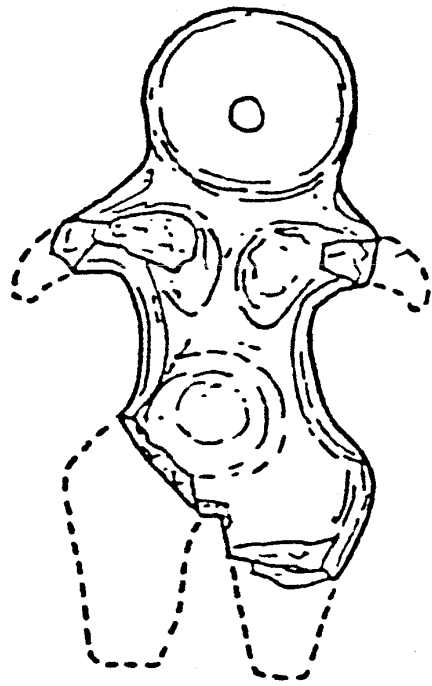


a

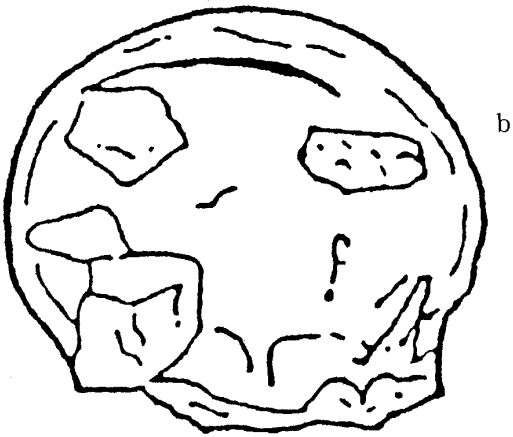
縄文晩期
 鹿児島県上加世
 田遺跡出土 宮
 内克巳「九州縄
 文時代土偶の研
 究」(九州考古
 学55号)九州考
 古学会1980



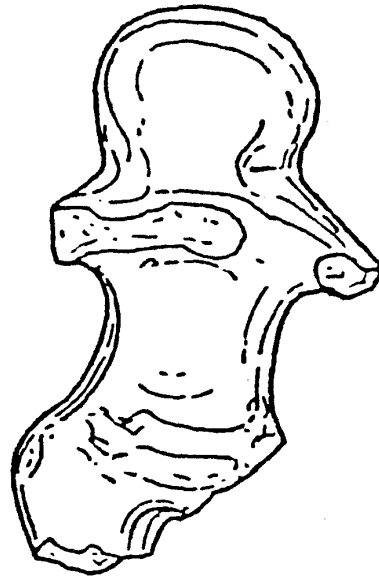
a



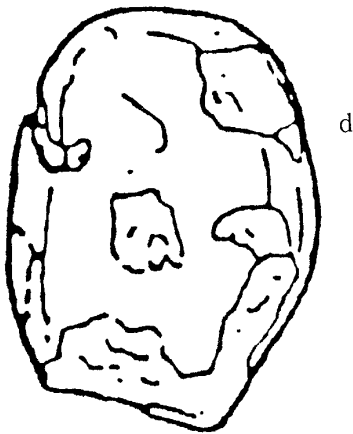
a



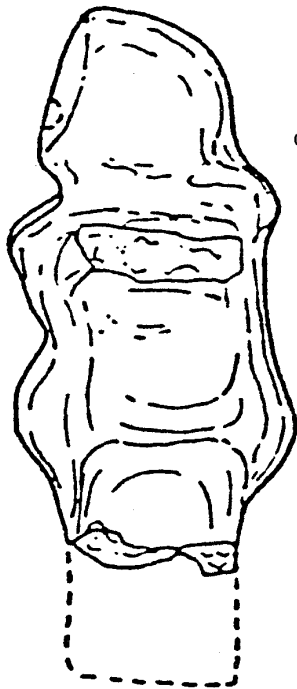
b



b



d



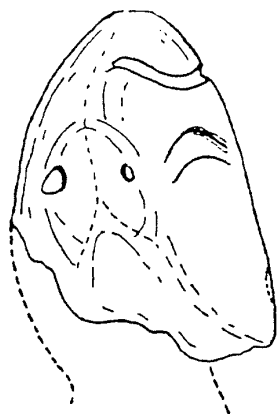
d

縄文後期 熊本県塚原遺跡出土
 上野辰男・富田紘一
 「上野辰男蒐集考古学資料図録」
 1986

縄文後期 熊本県太郎迫遺跡出土
 上野辰男・富田紘一「上野辰男蒐集考古学資料図録」1986

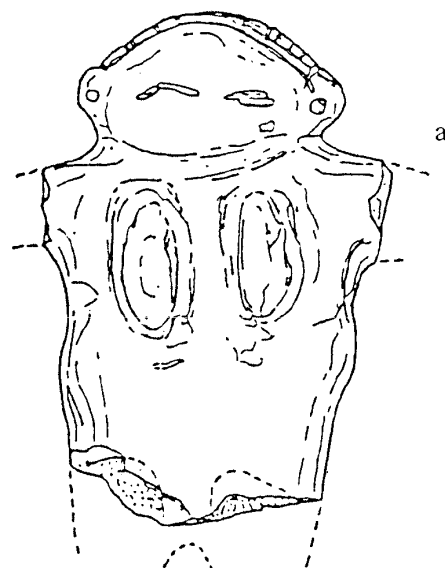


a

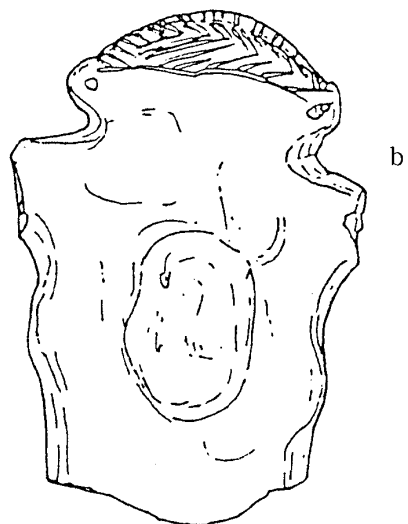


d

縄文後期
 熊本県三万田遺跡
 出土
 上野辰男・富田紘一
 「上野辰男蒐集考古学資料図録」1986



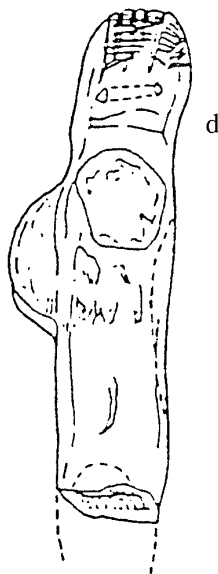
a



b

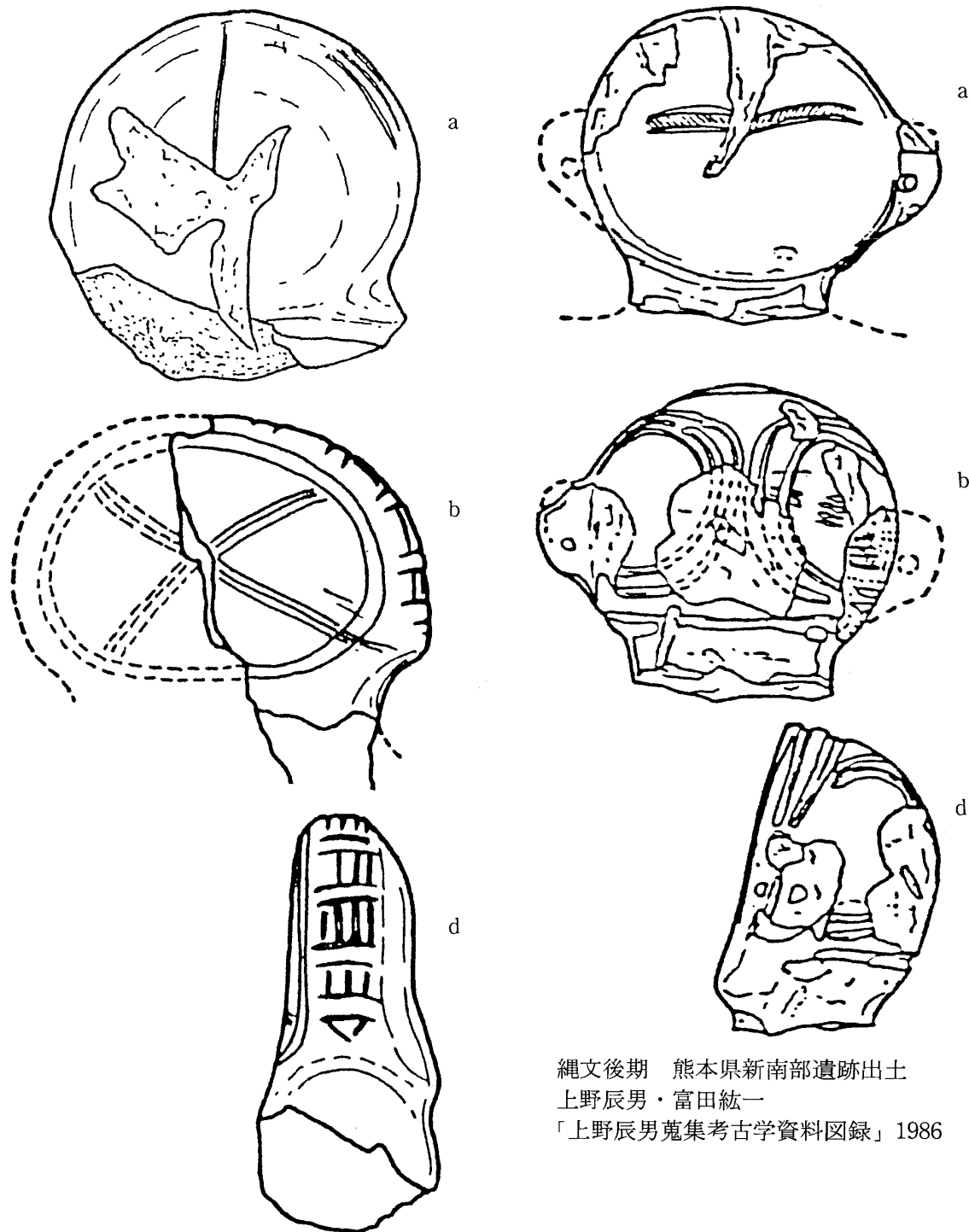


c



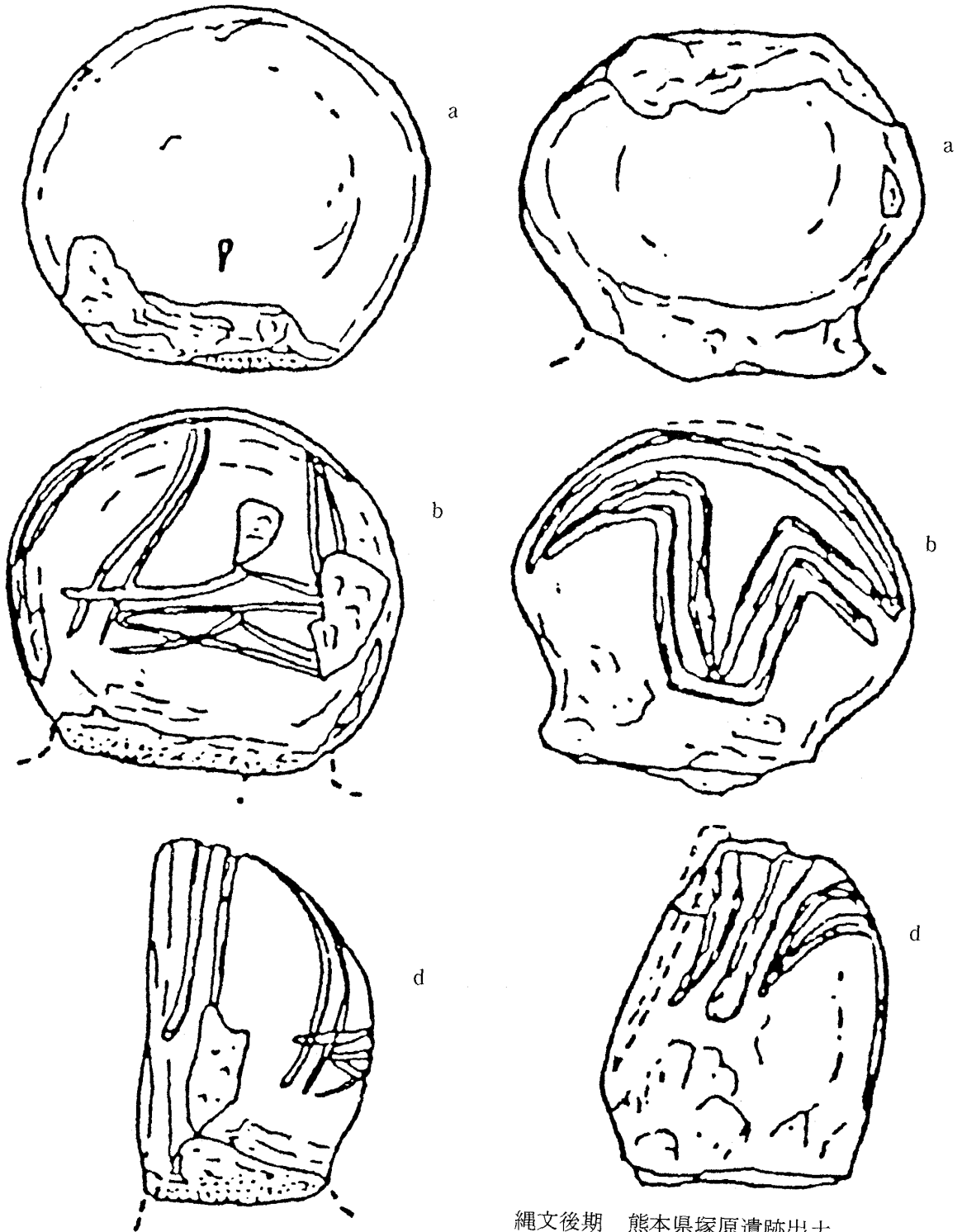
d

縄文後期 熊本県四万寄
 遺跡出土
 上野辰男・富田紘一
 「上野辰男蒐集考古学資料
 図録」1986



縄文後期 熊本県新南部遺跡出土
 上野辰男・富田紘一
 「上野辰男蒐集考古学資料図録」1986

縄文後期 熊本県三万田遺跡出土
 上野辰男・富田紘一
 「上野辰男蒐集考古学資料図録」1986

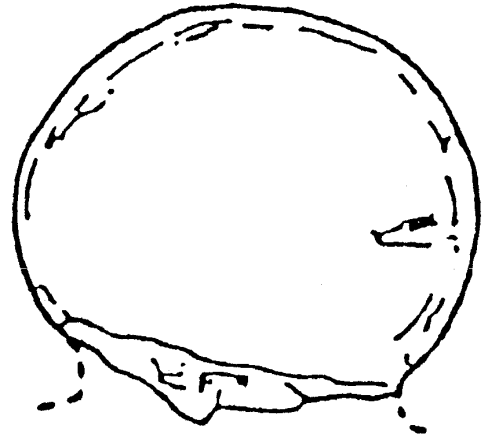


縄文後期 熊本県新南部遺跡出土
 上野辰男・富田絃一
 「上野辰男蒐集考古学資料図録」1986

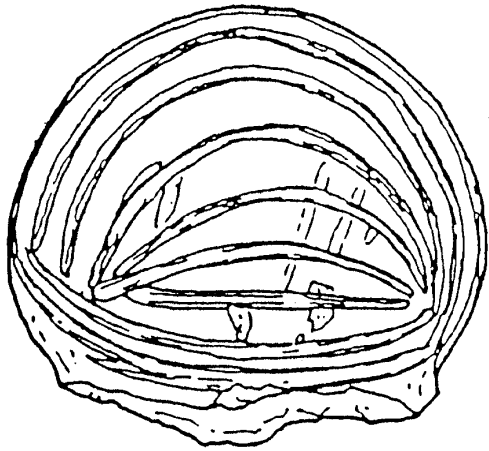
縄文後期 熊本県塚原遺跡出土
 上野辰男・富田絃一
 「上野辰男蒐集考古学資料図録」1986



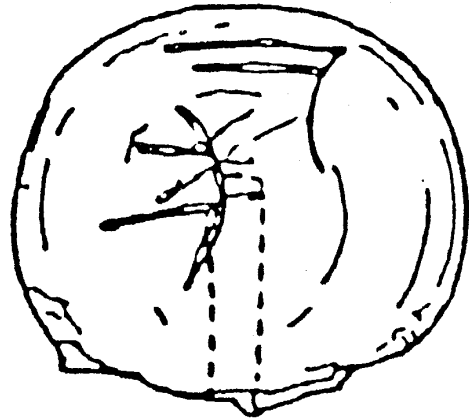
a



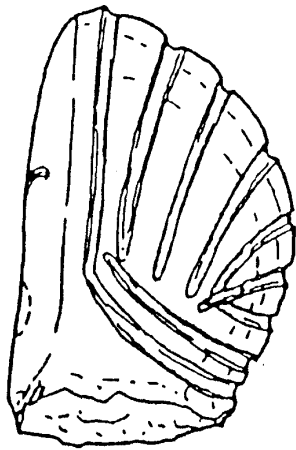
a



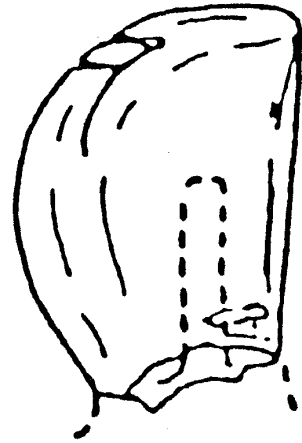
b



b



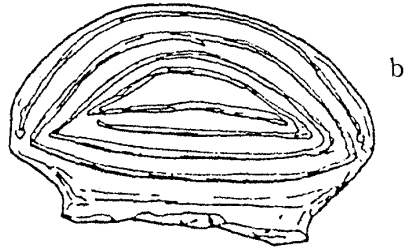
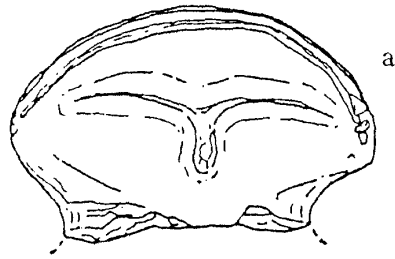
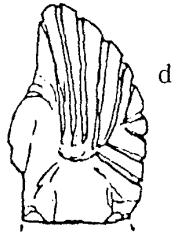
d



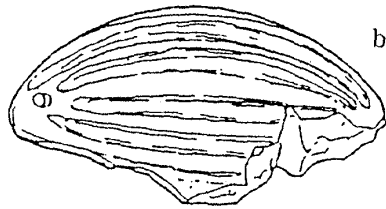
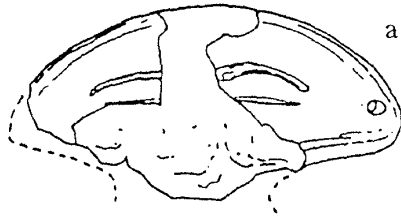
d

縄文後期 熊本県山海道遺跡出土
上野辰男・富田紘一
「上野辰男蒐集考古学資料図録」1986

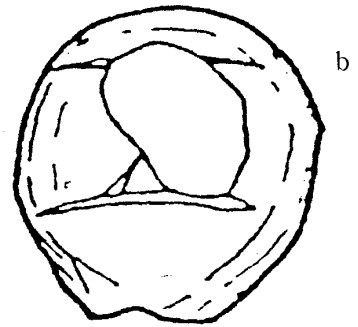
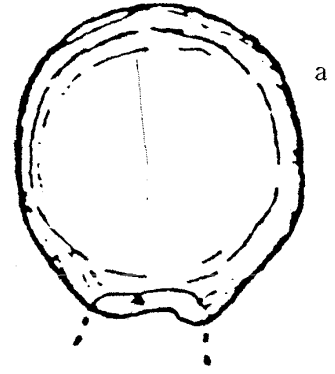
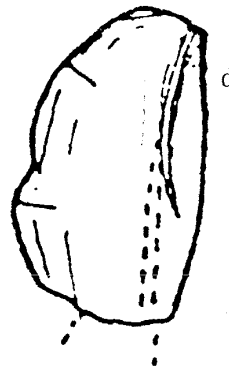
縄文後期 熊本県新南部
遺跡出土 上野辰男・富田紘一
「上野辰男蒐集考古学資料図録」
1986



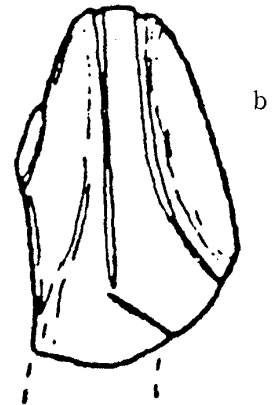
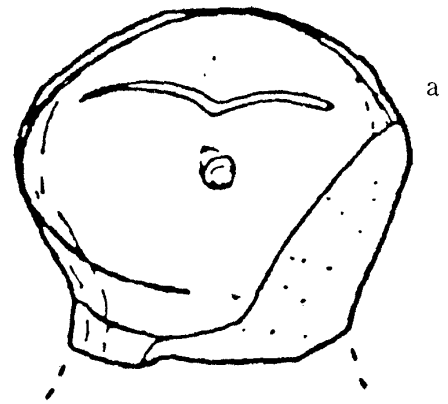
縄文後期
 熊本県太郎迫遺跡出土 上野辰男・富田絃一
 「上野辰男蒐集考古学資料図録」1986



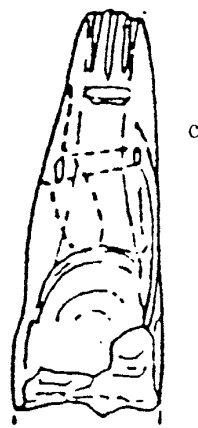
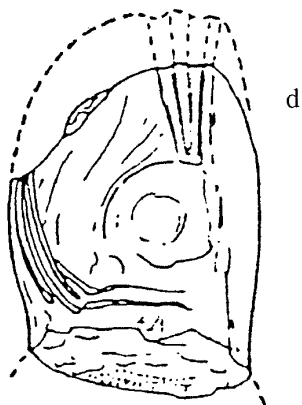
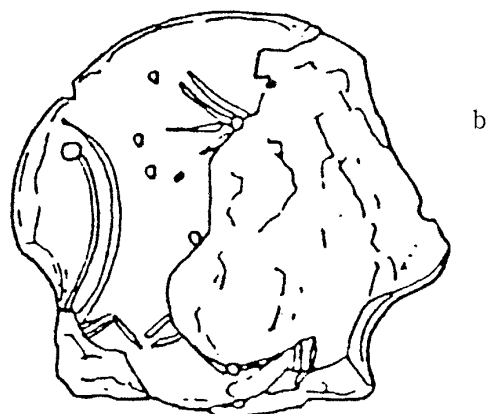
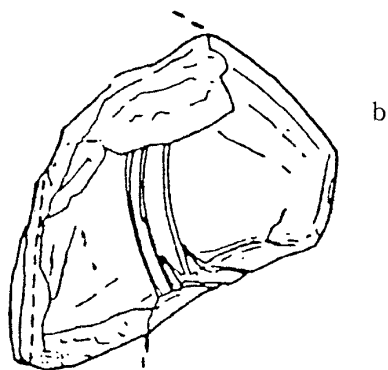
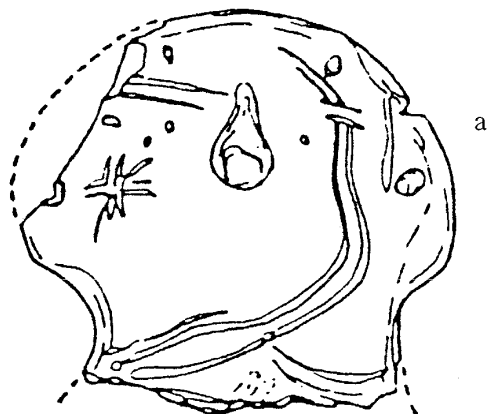
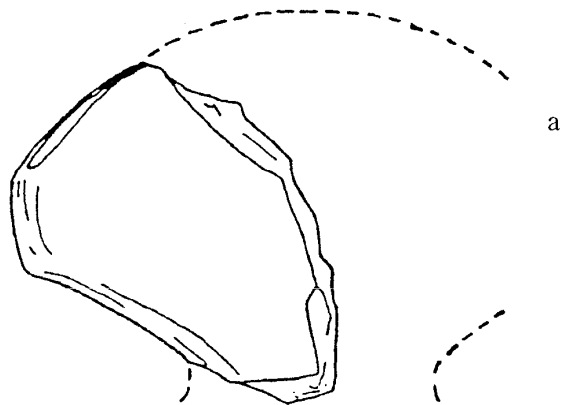
縄文後期
 熊本県太郎迫遺跡出土
 上野辰男・富田絃一
 「上野辰男蒐集考古学資料
 図録」1986



縄文後期 熊本県
 新南部遺跡出土
 宮内克巳「九州縄
 文時代土偶の研究」(九州考古学55号) 九州考
 古学会1980

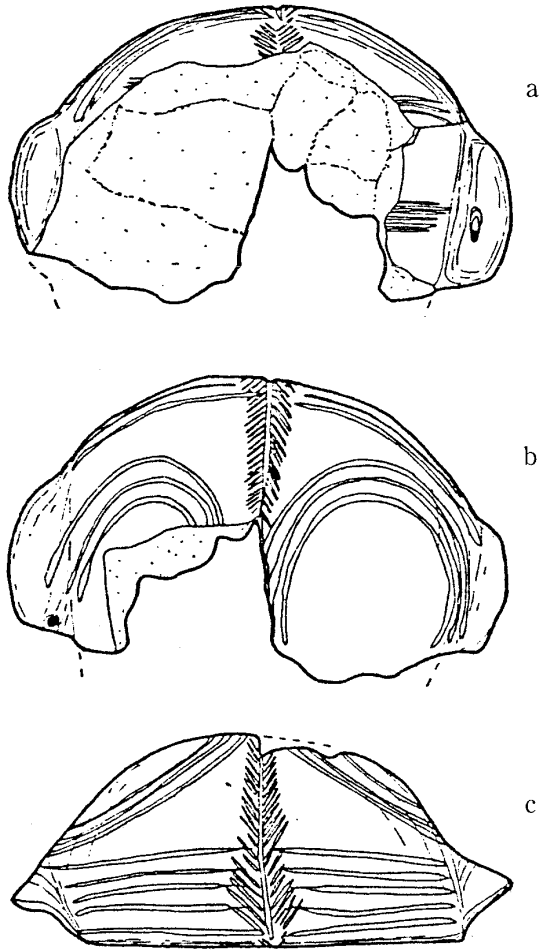


縄文後期
 熊本県三万田
 遺跡出土
 宮内克巳「九
 州縄文時代土
 偶の研究」
 (九州考古学55号) 九州考古学会1980

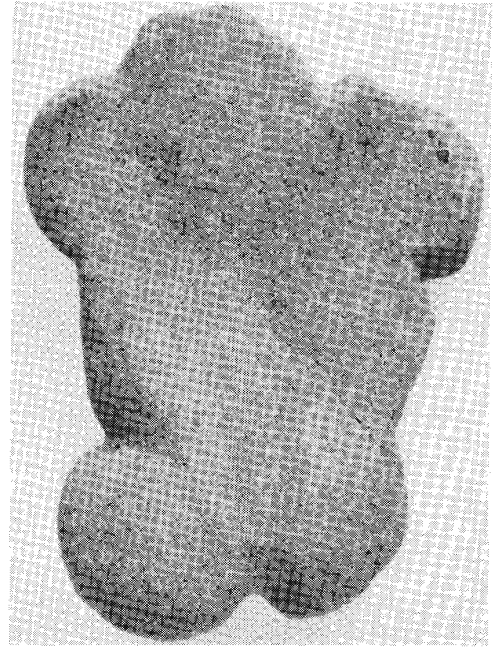


縄文後期 熊本県五丁中原遺跡出土
上野辰男・富田紘一
「上野辰男蒐集考古資料図録」1986

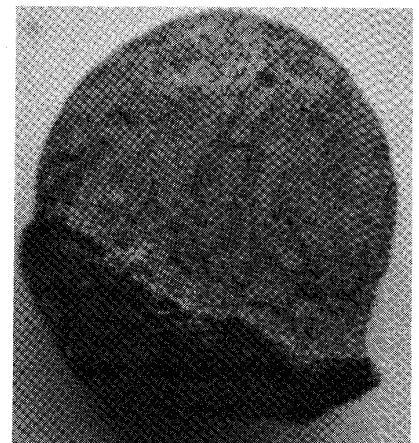
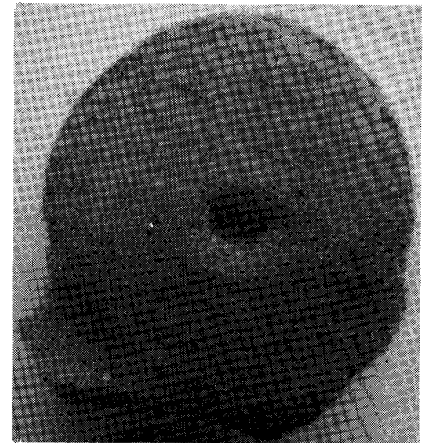
縄文後期 熊本県太郎迫遺跡出土
上野辰男・富田紘一
「上野辰男蒐集考古資料図録」1986



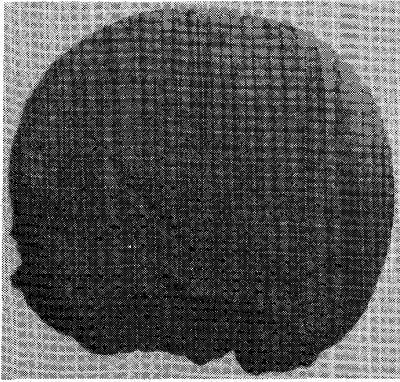
縄文後期 熊本県大野貝塚出土
 宮内克巳「九州縄文時代土偶の研究」
 (九州考古学55号)九州考古学会1980



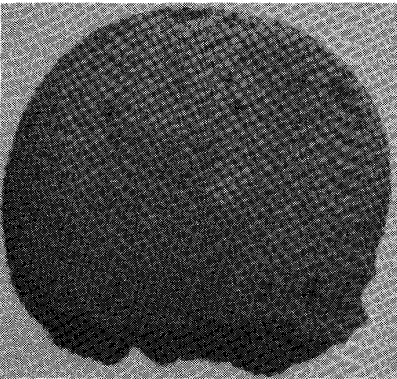
縄文後期 熊本県上南部遺跡出土
 (熊本市立博物館所蔵。筆者撮影)



縄文後期 熊本県上南部遺跡出土
 (熊本市立博物館所蔵。筆者撮影)

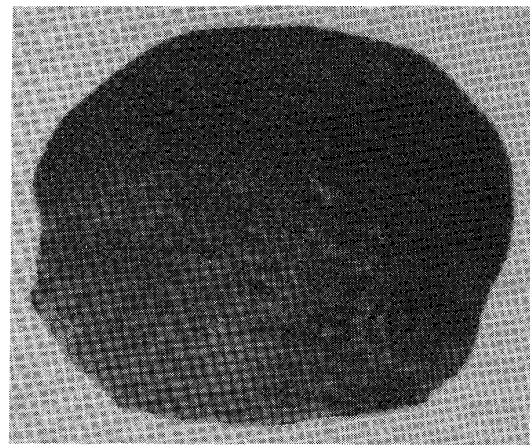
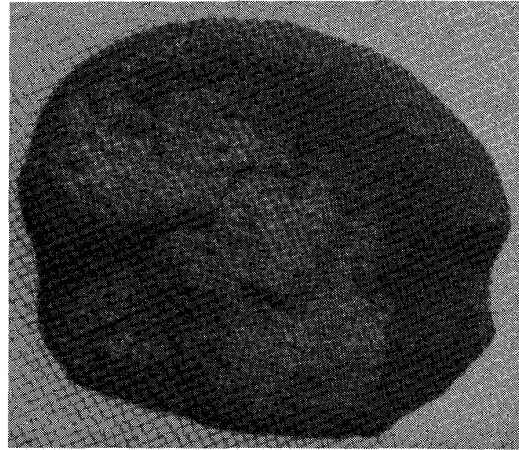


a

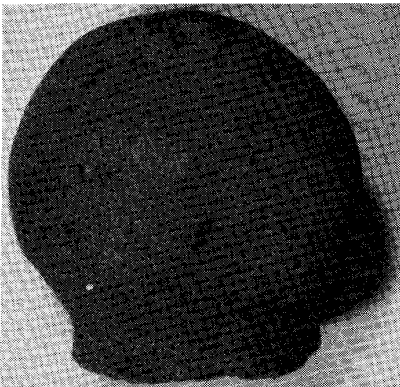


b

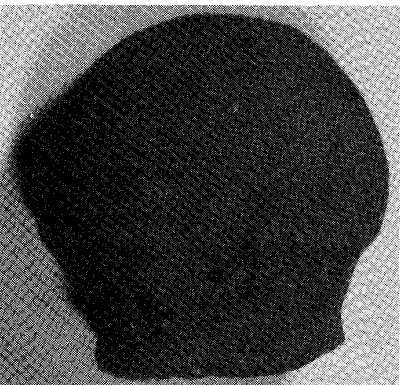
縄文後期 熊本県三万田遺跡出土
(熊本市立博物館所蔵。筆者撮影)



縄文後期 熊本県上南部遺跡出土
(熊本市立博物館所蔵。筆者撮影)



a



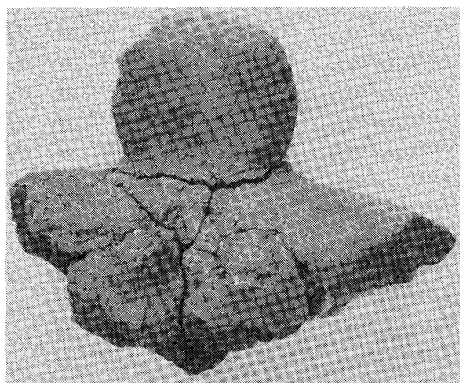
b

縄文晩期 大分県大石遺跡出土
(別府大学所蔵。筆者撮影)

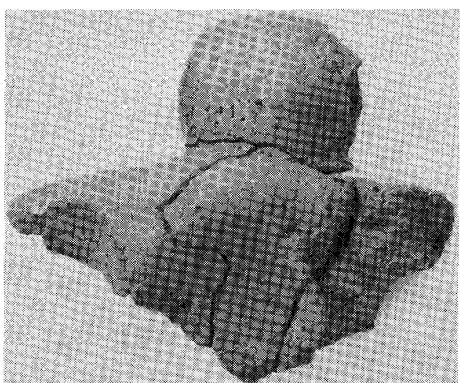


a

縄文後期 熊本県上南部遺跡出土
(熊本市立博物館所蔵。筆者撮影)



a

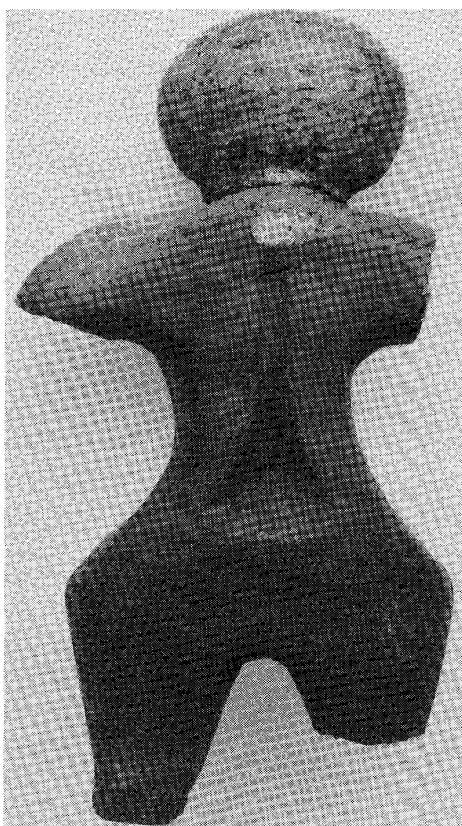


b

縄文後期 熊本県上南部遺跡出土
(熊本市立博物館所蔵。筆者撮影)



a



b

縄文後期 熊本県上南部遺跡出土
(熊本市立博物館所蔵。筆者撮影)

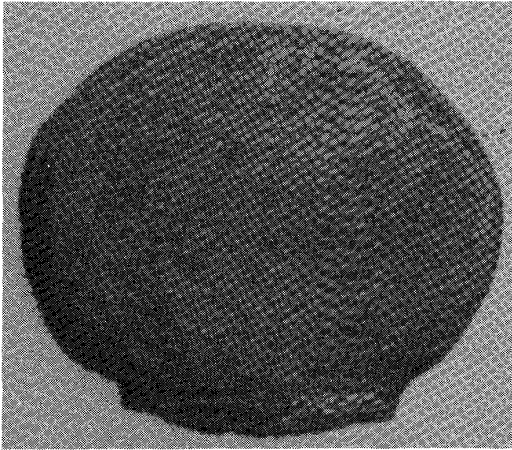


a

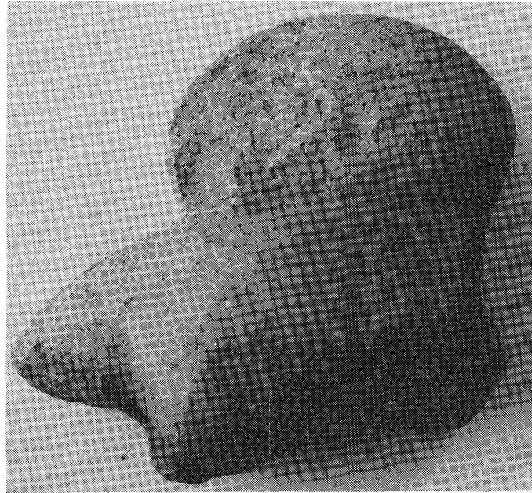


b

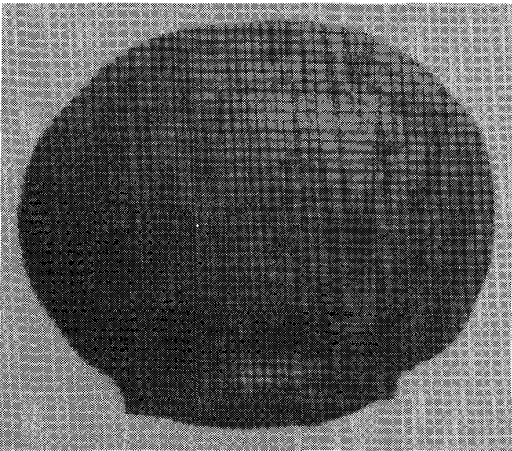
縄文後期 大分県駒方遺跡出土
(別府大学所蔵。筆者撮影)



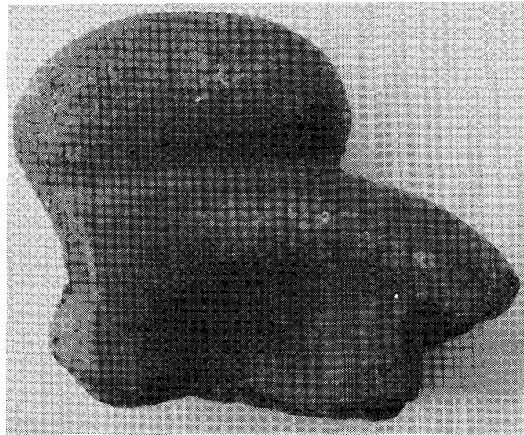
a



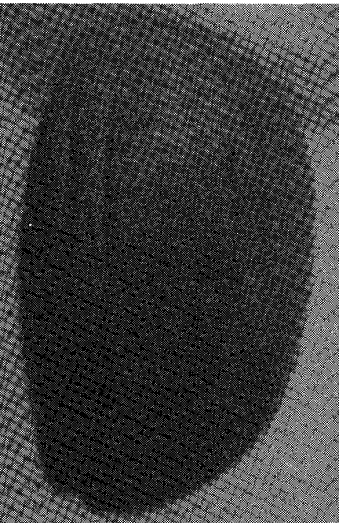
a



b



b



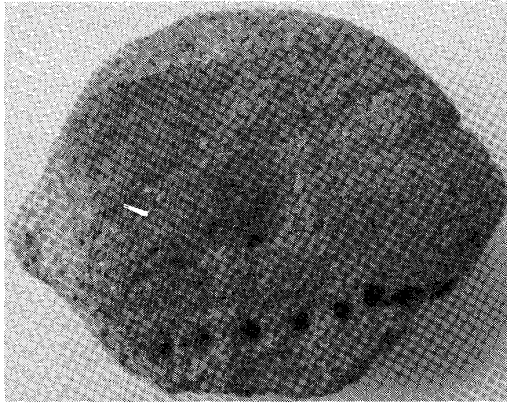
c



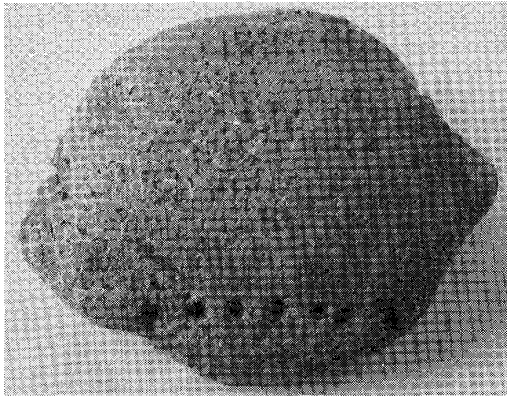
c

縄文後期 熊本県三万田遺跡出土
(泗水町歴史民俗資料館所蔵。筆者撮影)

縄文後期 熊本県上南部遺跡出土
(熊本市立博物館所蔵。筆者撮影)



a

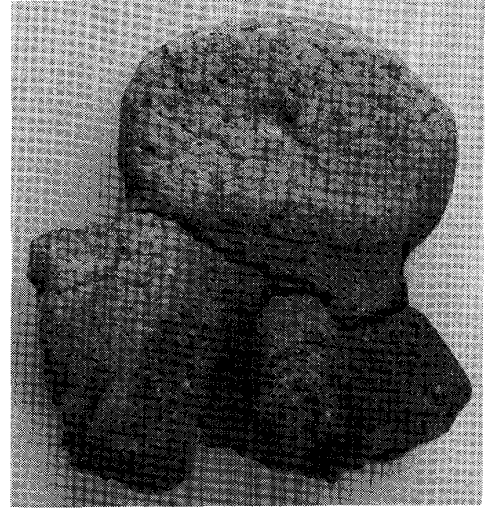


b

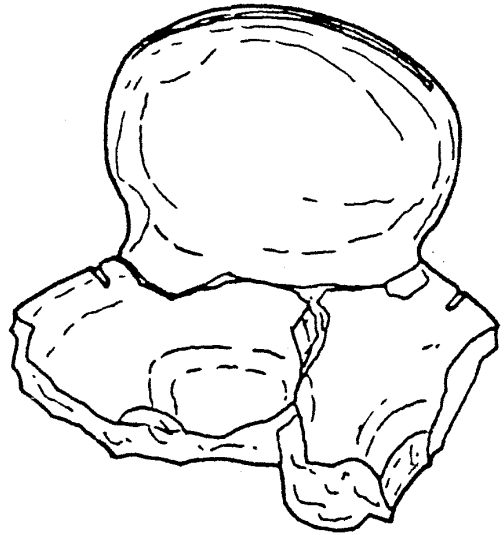


c

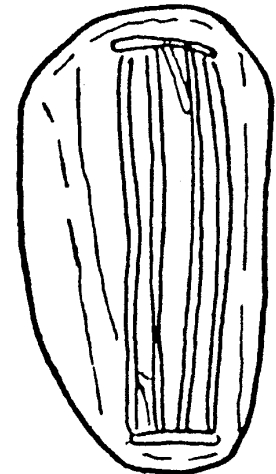
縄文後期 熊本県三万田遺跡出土
(泗水町歴史民俗資料館所蔵。筆者撮影)



a

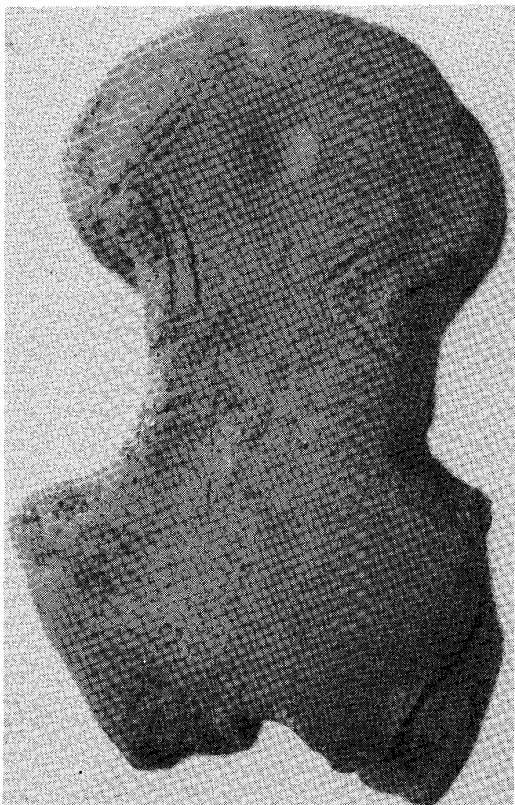


b

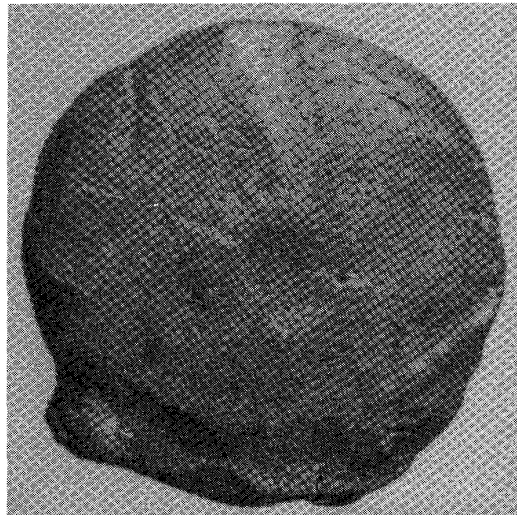


c

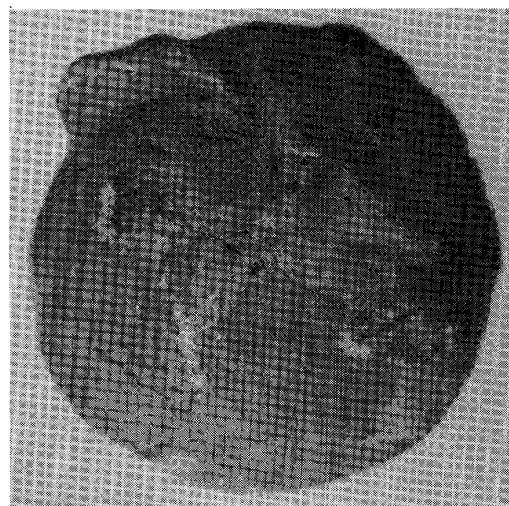
縄文後期 熊本県三万田遺跡出土
(泗水町歴史民俗資料館所蔵。筆者撮影)



a



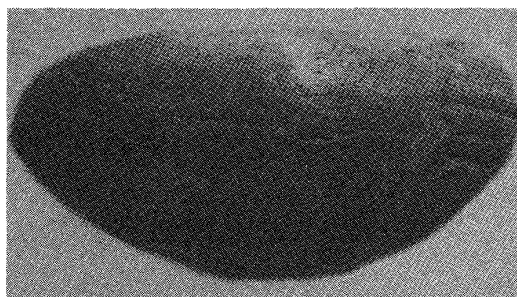
a



b



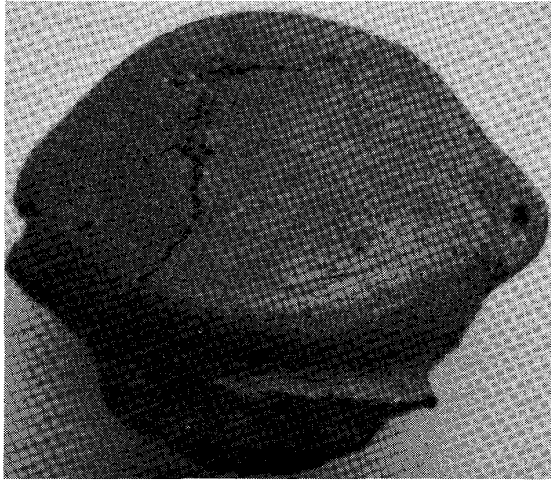
b



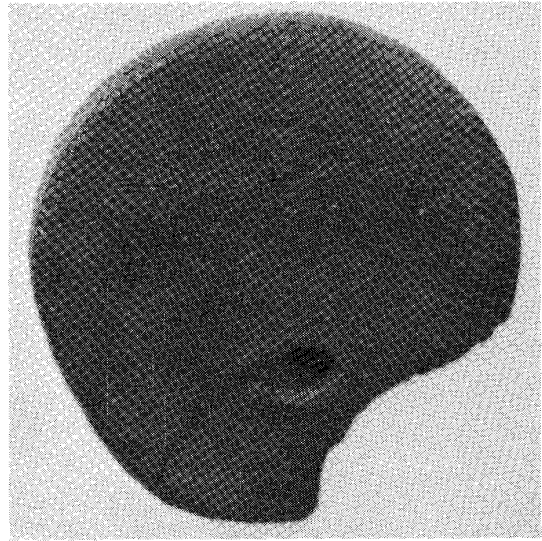
c

縄文後期 熊本県三万田遺跡出土
(熊本市立博物館所蔵。筆者撮影)

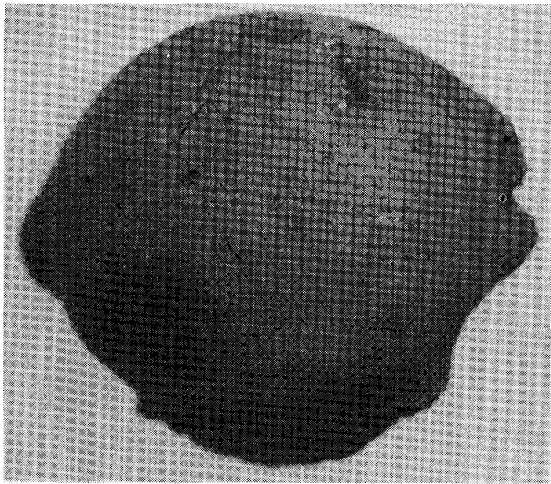
縄文後期 熊本県上南部遺跡出土
(熊本市立博物館所蔵。筆者撮影)



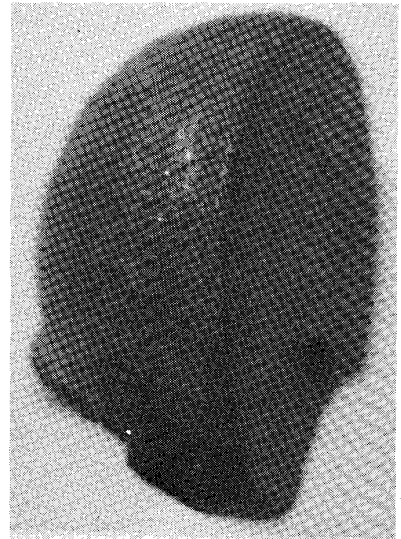
a



a

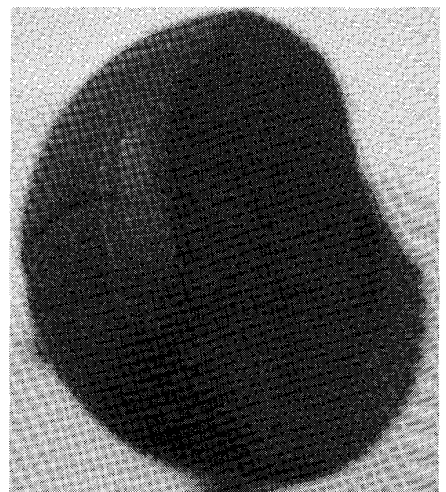


b



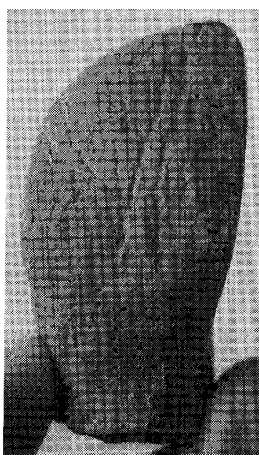
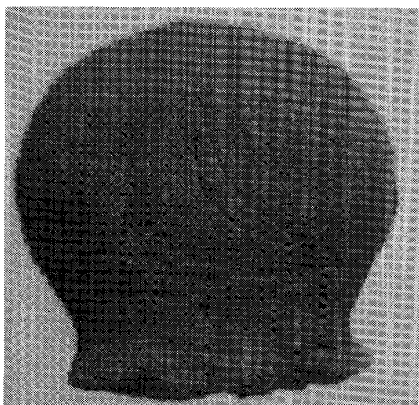
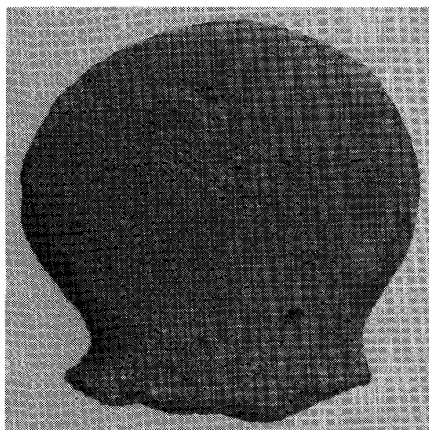
b

縄文後期 熊本県上南部遺跡出土
(熊本市立博物館所蔵。筆者撮影)

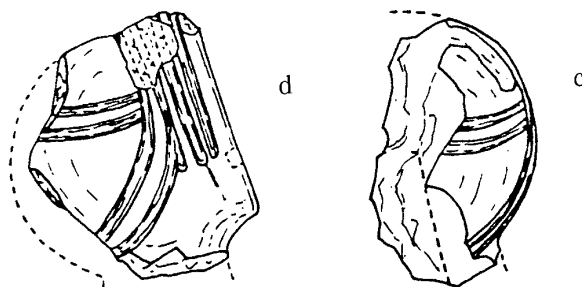


c

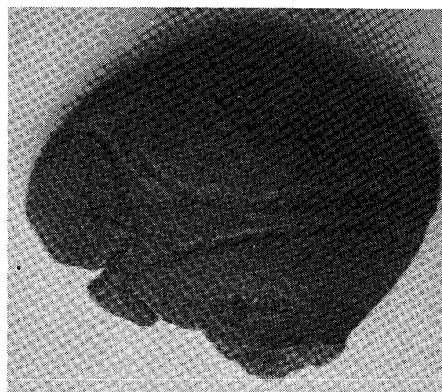
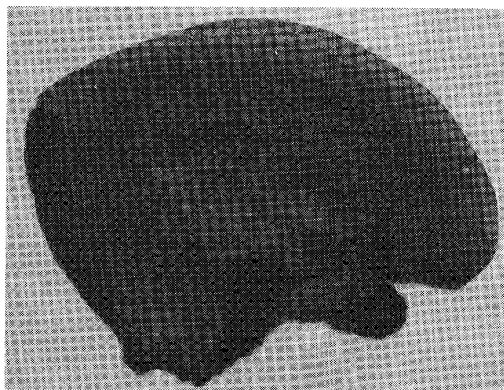
縄文後期 大分県駒方遺跡出土
(別府大学所蔵。筆者撮影)



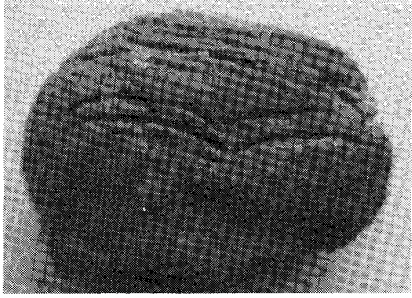
縄文後期 熊本県上南部遺跡出土
(熊本市立博物館所蔵。筆者撮影)



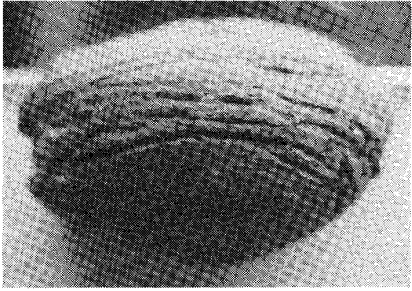
縄文後期 熊本県上南部遺跡出土
(熊本市立博物館所蔵。筆者撮影)



縄文後期 熊本県上南部遺跡出土
(熊本市立博物館所蔵。筆者撮影)

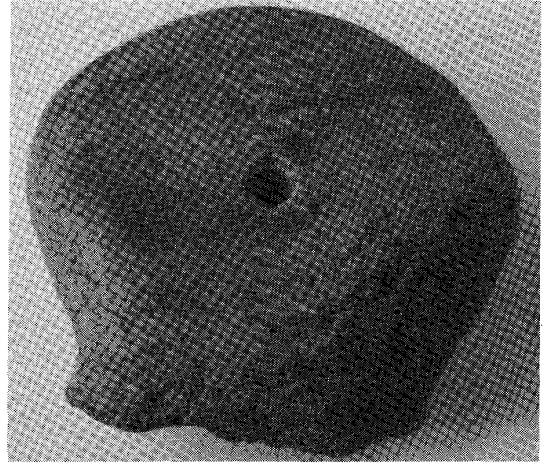


a

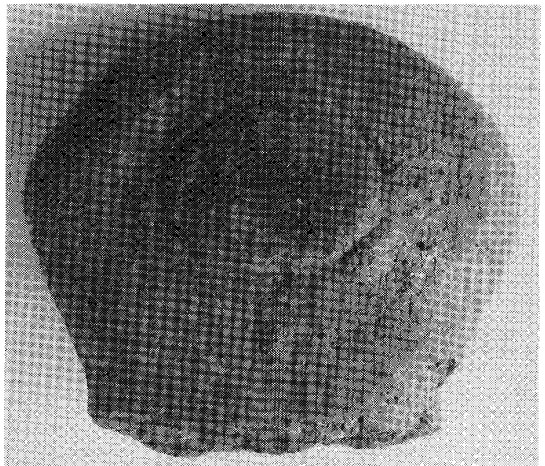


c

縄文後期 熊本県ワクド石遺跡出土
(熊本市立博物館所蔵。筆者撮影)

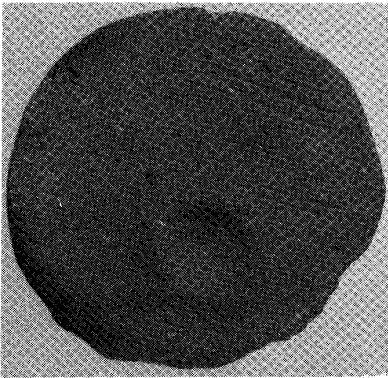


a

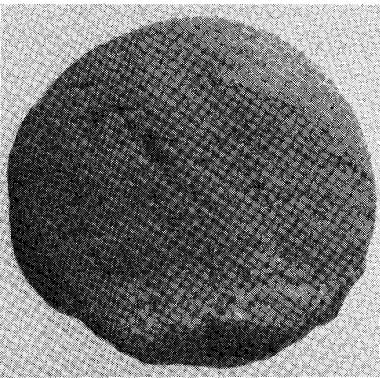


b

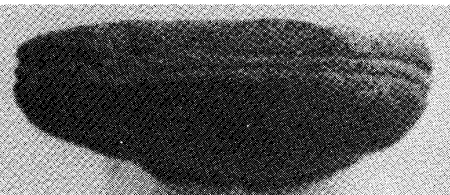
縄文後期 熊本県三万田遺跡出土
(熊本市立博物館所蔵。筆者撮影)



a

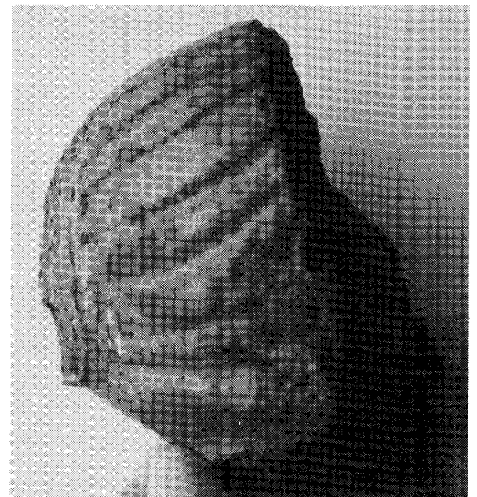


b

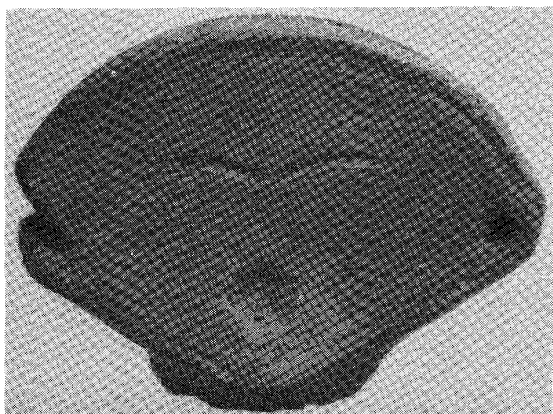


c

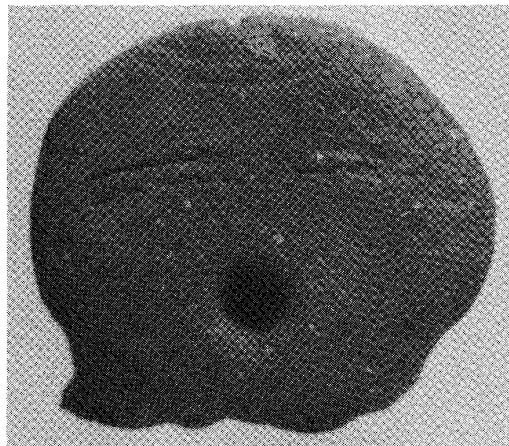
縄文後期 熊本県太郎迫遺跡出土
(熊本市立博物館所蔵。筆者撮影)



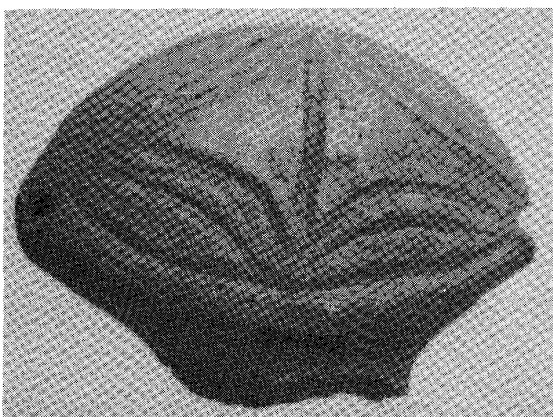
縄文後期 熊本県上南部遺跡出土
(熊本市立博物館所蔵。筆者撮影)



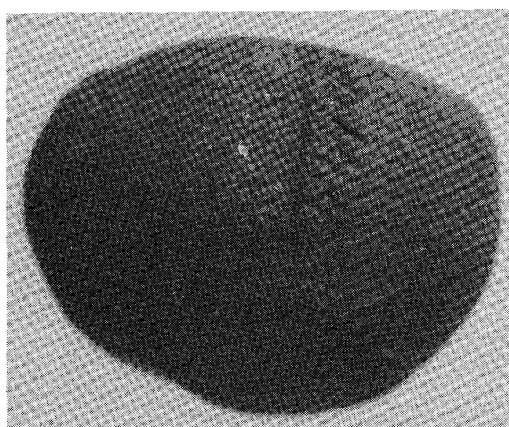
a



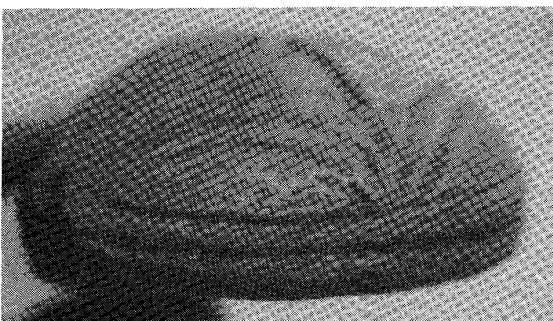
a



b



b

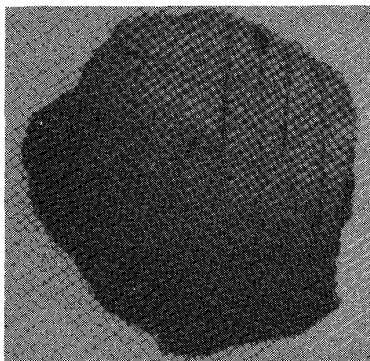


c

縄文後期 熊本県三万田遺跡出土
(熊本市立博物館所蔵。筆者撮影)

縄文後期 熊本県上南部遺跡出土
(熊本市立博物館所蔵。筆者撮影)

- 註
- a ……顔面
 - b ……後頭部
 - c ……頭頂部
 - d ……側面



縄文後期 熊本県上南部遺跡出土
(熊本市立博物館所蔵。筆者撮影)

の可能性の強いものかなり混在しているので、筆者は従来の考古学とは別に家政学学科の感覚で、剃髪の問題ともども結髪についても将来さらに検討を加えたいと考えている。

最後に、考古学関係についてご教示賜った諸先生および出土品の調査に関してご協力頂いた諸氏に謝意を捧げ、結びとする。

なお、本研究は第三八回日本家政学会において報告した。

参考文献

- 江坂輝彌 「土偶」校倉書房 一九六〇
 宮内克巳 「九州縄文時代土偶の研究」
 (九州考古学五五号)九州考古学会 一九八〇
 江坂輝也・野口義麿 「古代史発掘 三」講談社 一五七九
 上野辰男・富田紘一 「上野辰男蒐集考古資料図録」一九八六
 尾関清子 「縄文土偶の結髪の研究を中心に」本学紀要第二十号
 一九八五

さまざまな沈線がある。これも抽象的に沈線を現わしたとも考えられるし、あるいは、植物または動物の繊維などを使って冠り物（帽子）を表現しているのかも知れない。

(5) 髪形の冠り物か紛らわしいもの

41は、髪形というより頭布またはネット状の冠り物を使用していたことを想起させる。しかし頭髪と考えた場合は、極短かくカットした髪をオールバック状に梳き上げたようにも見える。

33、34、36は、見方によってはうず巻き風の鬘をデフォルメしたもので、後頭部全体に結った若向きの髪形ではないだろうか。考えようではネット状の冠り物にも思えるが確証はない。

(6) 明らかに剃髪であるもの

かつて筆者が熊本、大分両県下の土偶を調査した際実検した頭部資料二七例中、一応剃髪（坊主頭）土偶と想定できたのは八例であった。（19、20、21、22、24、25、26、27）。なおすでに報告されているものの中にも剃髪土偶が含まれている可能性はあるが、剃髪に関しては細微な特徴を実測図から観察することができないため一応それらは除外した。

まとめ

土偶は北は北海道から、南は九州に至る日本全土で出土している。その形は多彩であるが、実のところ何の目的で制作されたのか明らかでない。

土偶——ひとがた——人形——果して何に使われたのだろうか。世界各地にみられるように、縄文人もこの粘土を焼いて作った人形に願いを込めて子供を授かるようにと祈り、あるいは災難を避けるため、そのほか山の獲物をより多く獲るためとか……いろいろな願望から護符のようなものに使ったと考えるのも自然である。

あらゆるところに神が存在すると信じた古代人であっても、親が子を思う心は現代と同じではなかったろうか。子供の誕生とともにその子の無病息災を願って土偶を作り、あるいは神に仕える巫女たちが土偶を手にすることによって、靈感が与えられ自然界のあらゆる邪気を払うことができると信じたのかも知れない。

確かに、縄文時代に大陸との間で交流を裏付けるような資料がいくつ出土している。その事実は魏書完成よりはるか以前に大陸や南方諸国との間に交流のあったことを意味するが、だからといって九州出土の剃髪土偶を当時の風俗として、直ちに大陸の風習と直接結び付けることはできないけれども、現に二七例中八例はいわゆる坊主頭であり、その事実は現在アマゾン奥地や中国山間部の一部土俗等に対比し興味深い問題を提起するといえよう。しかし縄文時代の土偶の多くが、細い紐状の粘土で、目、鼻、口を描いているが、九州地方の土偶の大半は沈線で施されている。一体なぜだろうと疑問に感ずるが、頭髪を省略された土偶に、目、鼻が写実的に描かれていたらどうであろうと考えた時、やはり沈線で引いたかもめ形をした優雅な眉が適当ではないかと思う。また、九州地方の頭部や顔面を省略した土偶の中にも、東北、関東地方に見られるような結髪

を現わしたまさに平安朝のお姫様風の顔である。後頭部の頭髮は省略されているが、前面から推測すると、垂髪すいはつであってもおかしくない。

また整髪には、当然刃物を必要とする。しかし当時は現代と違い鋭利な金属器はなかった。だが縄文人は、石製のナイフ（フレイク）一つで髪も髯も調えたのである。現に筆者は硬質頁岩けつがんで作ったナイフ形石器で髪を切ったことがあるが、極めて切れ味は良く現在の金属製にさほど劣らないことが分った。

(2) 鬢らしきもの

4 は、後頭部に鬢を思わせる円形の線刻のある例である。ドーナツ状かそれともうず巻き風か断定し難いが、いずれにしても結髪を表現した可能性が強い。この髪かみの結び方は簡単で、紐とヘアピンがあれば、一人で容易にまとめることのできる単純な結髪である。

(3) 美豆良らしきもの

30、39については、後頭部に()状の沈線があるので、美豆良を表現しているのではないかと考えられる。また、この美豆良の類は59に示した青森県出土（縄文晩期）の土偶に共通した特徴がある。従来、美豆良は古墳時代以降、もっぱら男性だけの髪形とされていたが、土偶に表現されているのを見ると縄文時代は女性も結っていたらしい。

また、美豆良の呼び名の起りは、「耳連ら」で、耳の辺りで結うという意味があり、現在もネパール地方の女性の髪形として一般に行われている。ちなみにネパールの女性は、長い髪かみの仕末を単純且

つ働き易くするため次のようにまとめているようである。先づ頂髪を左右に分け、おのおのの髪を耳の辺りから三つ編みに髪の長さだけ編み、毛先を編み始めに重ね、輪になるように紐で縛っている。

髪の長さに応じて、三つ編みの輪が二重ない至三重になる。この髪形は紐さえあれば、他人の手を借りないで容易に結び上げることができる。

(4) 冠り物らしきもの

42 は、額に鉢巻きでもしているようである。これも単に好みでしたものかあるいは特殊な職業、例えば呪術師や祈祷師などが頭に巻いていたのかも知れない。

8、15、16、17、29 は、額の生え際にそって、三本から四本の沈線がありそれが耳の上で切られているが、これは正面からヘアバンドを締め、沈線の切れた部分から頭髪をヘアバンドの上に出した状態ではないだろうか。

6、7、11、13、18、30、32 は、額の生え際から一本ない至二、三本の沈線がある。中国の少数民族、苗族や布依族等のほとんどがターバンや頭布を用いているが、これは働き易いからである。多分九州の縄文女性も、頭にはなにか冠っていた可能性が強い。日本でも山形土偶は頭布を冠っているようであるし、群馬県中野谷出土（縄文後期）の土偶はあきらかに鉢巻きをしているようだ。

40 の土偶の後頭部と長野県出土の土偶60 は類似点があり、一見帽子でも冠っているようである。

2、8、9、10、28、31、35、37、38 と多くの土偶の後頭部にさ

② 眉だけのもの

10、21、39、44、45の五例あるが、10は二条ないし三条の沈線で顔のほぼ中心から鈍角状に釣り上った眉が描かれている。39、44は二条の沈線で左右の眉が連なり奇異な顔である。21は、かもめ形の長いおおらかな眉、45は、短くままとまった平凡な眉が描かれている。

③ 口だけのもの

7、13、14、15、20、27、43、52、54の九例ある。いずれも前述した手法でつけられた口である。7はセンターに二条の沈線で鼻筋を表わし、口元には複数の沈線が八の字に走っている。これは頬のしわと考えてよいだろう。

④ 眉、口等総て省略したもの

9、12、18、19、22、24、25、26、29、31、35、37、38、47、48、49、50、51、53、56と二〇例。この種の顔の省略された理由は何だろう。大変興味深い問題である。ただどの顔を見てもノツペラボーで締らないがそれほど異和感はない。

なお顔面が扇形をしたものが2、30、33、34、41、46の六例ある。

41は、両手と下半身を欠失している。顔面は一見老婆を思わせる形姿であるが、胸には「たらちね」の枕言葉が相応しい乳房で、いわゆるずん胴のウエストも、子育てが終った女性の表現ではないかとさえいいたくなる。

2は、短かい眉と大きな口が丁寧につけられている。顔面の表現は小じんまりしているが、額だけでなく顎にまで輪郭線で表わした

特異な形状のものである。

33は、かもめ形の眉と隆起した鼻がつけられているが、口は省略されているようである。

34は、大きく欠失した顔面ではあるが、眉と目らしきものが描かれている。

46は、秋田県小坂町大谷地遺跡出土(縄文前期)の岩偶に類似した土偶で、頭、胴、脚をほぼ輪郭線で表わした変わった形状のものである。

同じ日本列島の縄文文化の中でも、九州地方出土の土偶の表情は、どことなく南方の臭いがする。それは極端に省略された顔面などから、若干奇異に感じるためであろうか。

三、髪形について

(1) オカッパらしきもの

1及び28は頭頂部に矢羽状の複数の沈線を有するが、これは頭頂部の線3、5、7、11、12、13、14に共通する文様である。例えば、大腿部に施文された例(熊本県三万田原田出土。縄文後期)もある。また後頭部の沈線の状態から推測すると、大半は頂髪を中央で左右に分け襟元でカットされているらしい。この髪形は、結び髪というよりもむしろ自然に伸びた頭髪を切り揃えた程度のもので、単純なおカッパ頭のようなものであったのかも知れない。

7、14は、額部の左右に数条の細い沈線で額髪ひたいがみや俗にいう愛嬌髪

1、6、42は、二条の沈線で眉を表現している。ただ複線であるためか一見目のようにも見えるが断定することはできない。見るからに素朴でほほ笑ましい。

しかしながら同じかもめ形の眉にしても、特に11は積極的に眉毛を沈線で描いているが、これは極めて珍しく今のところ類例は確認されていない。しかしこれだけ眉の描写に念を入れているにも関わらず、顔面はいわゆるノツペラ棒で口のみ表現されている。

55は、関東以北に多い山形土偶を思わせる珍しい土偶である。目を鼻を紐状の粘土で表現しているが、筆者の知る限り九州地方ではこれ一例のみである。

この外16、17はかなり磨耗しているので顔面の状態は明らかでないが眉と口は残存している。16は耳の上にスリットらしいものがあり、また頸部に刺突文が一周している。

23は、顔面に深い三条の沈線の入った土偶頭部の半欠品である。頬から顎にかけて欠失しているが、丸顔でノツペラ棒の仲間である。ところが、この顔面の欠失部を図上で復原してみると、おおむね(図3)のような怪奇に満ちた形相になった。

無論この図はあくまでも沈線が左右対相であったと仮定した場合のことである。上端にわずかに見える線は、例のヘアバンドかそれに類したもので問題はないが、顔面に大きく描かれた三条の沈線、とりわけ一番下の目に相当する沈線は中間部を意識的に広げて細長く菱形に挟り、さらに、中央に縦にスリットが入っている。写真が不鮮明なので分りにくいですが、明らかに十字状の細い切れ目と考えて

よい。

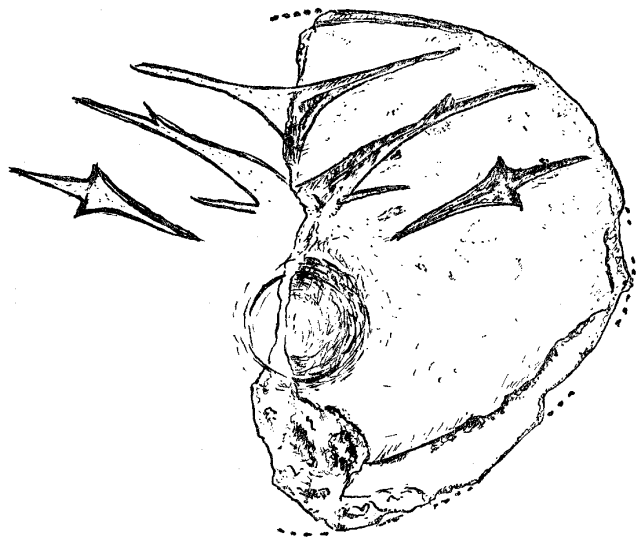


図3

同様の例は、埼玉県狭山市出土の人面把手(縄文中期)の左目(右目は正常)に残っている。これは篋で大きく十字に刻んでいるのでさほど異様には見えない。しかし23の場合は、目尻も釣り上がりタッチが鋭い。中間の沈線は眉、さらにその上の線は額の生え際を現わしたもので、極一般的な表現である。また、顔の中央の近い所に小指の先で押したような窪みで口が現わされている。従ってこの土偶は、異様な十字状の切れ目さえなければ、普通の可愛らしい顔だが、目の入れ方一つでこころも表情が変わるものと驚愕した。

の摂取が可能で、食生活は飛躍的に向上したであろう。

縄文時代を生き抜く人々にとって、食糧の確保は絶体の条件である。とすれば、そのいずれの条件も兼ね備えた九州地方は縄文人にとっては安住の地であり、各地にかなりの集落があったと考えてよい。従って形姿に特徴のある土偶が比較的多く出土しているのもそのためであるのかも知れない。

註一 三国志（「魏書三十一―二十九」古典研究会）汲古書院 一九七五
註二 三国志（「魏書三十一―三十」古典研究会）汲古書院 一九七五

一、土偶の特徴

九州地方の土偶は、ほとんどが縄文時代後期に属するとの教示を筆著は地元の研究から得た。特徴は、目、鼻、口を省略した顔面が扁平ないわゆるノツペラポーが主体であるが、中には眉、口を粗朴に表現したものもある。後頭部は通常半球状に近く、つまり、球を半截した切断面に顔が表現されている訳である。なお実査した資料中頭部の結髪については、五六例中、三三例にそれを裏付ける線刻が認められた。その外の八例は一部風化や破損による不鮮明なものもあるが、一応坊主頭の土偶と考えてよいであろう。

二、土偶の容姿

同じ縄文後期の土偶でも、例のハート形土偶（群馬県出土）57や、

みみずく土偶（千葉県・埼玉県出土）58は、全身に繊細な文様が施され、極めて手の込んだ作りになっている。それに比較すると九州地方の土偶は単純そのもので、豪華さはないがどこことなく可憐である。その代表的なものが19の土偶である。この土偶は手足の一部を欠損したのみでほぼ完形に近く、保存状態も良好である。

球体を半截した顔面には眉、鼻、口などの表現は一切ない。大きな頭部はまさに幼児を思わせるが、しかしバストには手でつまんだような乳房があり、細く締ったウエストや豊満なヒップは、うら若い女性を表現しているようにも考えられる。腹部は盛り上っていて、中心よりやや下った位置に小さなくぼみがある。この腹部の表現は縄文時代の土偶にしばしば見られるもので、一説では豊饒を願うためともいわれている。

19のbは、前掲土偶の裏面である。この場合は、背筋の部分が縦に折り込まれている。これがなにを意味しているのかは分らない。

このように丸い顔の土偶は、筆者の実検したものを合せると五二例にのぼった。それらは大別すると、①眉と口をつけたもの、②眉だけのもの、③口だけのもの、④ノツペラポーの四種類になった。

① 眉と口をつけたもの

1、4、6、8、11、16、17、23、32、36、42、55の十二例あるが、中でも4、8、32、36の眉は、絵に画いた翔んでいるかもめのように、優雅な形に統一されているのが特徴である。

丸い口は細い棒の先で軽く突いたものと、小指の先で押圧しただけの圧痕で現わしているが、それがいかにも愛らしい。

図2 九州地方人形・省略形土偶地名表

No.	遺 跡	所 在	備 考 (土偶数)
1	福岡県		
2	広田	糸島郡二丈町吉井	(3)
3	北古賀	福岡市西区四箇 嘉穂郡穂波町北古賀	(1) (1)
	大分県		
4	高畑	中津市中津	御領式 (2)
5	石原	宇佐市青森	三万田式 (1)
6	大石	大野郡緒方町大石	大石式 (1)
47	大野	大野郡大野町駒方	(1)
	長崎県		
7	篠原	南高来郡国見町神代	三万田式 (5)
8	小原	南高来郡有明町大三東	三万田式 (2)
	熊本県		
9	清原	玉名郡菊水町江田	御領式 (2)
10	付草	山鹿市城	(1)
11	牛志々岐	山鹿市志々岐	(1)
12	成竹	鹿本郡鹿本町御宇田	(1)
13	宮原	鹿本郡植木町宮原	御領式 (3)
14	古閑	鹿本郡植木町有泉	(1)
15	一木	鹿本郡植木町一木	御領式 (1)
16	町畑	菊池郡七城町小野崎	鳥井原式 (2)
17	亀尾	菊池郡泗水町亀尾	(1)
18	三万	菊池郡泗水町三万田	三万田式他 (57以上)
19	天城	菊池市赤星	(3)
20	クド	菊池郡大津町小林	(4)
21	御領	菊池郡合志町竹迫	(1)
22	山海	飽託郡北部町万葉寺	(2)
23	太郎	飽託郡北部町太郎迫	(11)
24	和泉	飽託郡北部町和泉	(1)
25	五了	飽託郡北部町貢	(8)
26	四方	飽託郡北部町四方寄	三万田式 (4)
27	塚原	菊池郡菊陽町辛川	御領式 (5)
28	航空	菊池郡菊陽町	(1)
29	弓削	熊本市弓削町	鳥井原式・御領式 (3)
30	竹ノ	熊本市立田町芭蕉	御領式 (5)
31	上南	熊本市上南部町	鳥井原式・御領式 (108)
32	立木	熊本市清水町檜ノ木	(1)
33	陣内	熊本市立田町陣内	三万田式 (1)
34	立南	熊本市新南部町	(13)
35	乾原	熊本市長嶺町乾原	(3)
36	殿ノ	熊本市長嶺町殿ノ山	(1)
37	道明	熊本市道明	(2)
38	上ノ	熊本市健軍町上ノ原	(9)
39	健軍	熊本市健軍町	(1)
40	水源	熊本市水源町	(5)
41	古閑	上益城郡益城町古閑	鳥井原式 (1)
42	御領	下益城郡城南町東阿高	御領式 (1)
43	松橋	下益城郡松橋町大野	三万田式 (2)
	宮崎県		
44	陣内	西臼杵郡高千穂町陣内	三万田式 (2)
	鹿児島県		
45	上加	加世田市上加世田	(2)
46	西ノ	川辺郡笠沙町西ノ蘭	(1)

富田絃一「土偶一九州地方一」(竹内理三他編『考古遺跡・遺物地名表』
柏書房 1983年4月20日)を改変

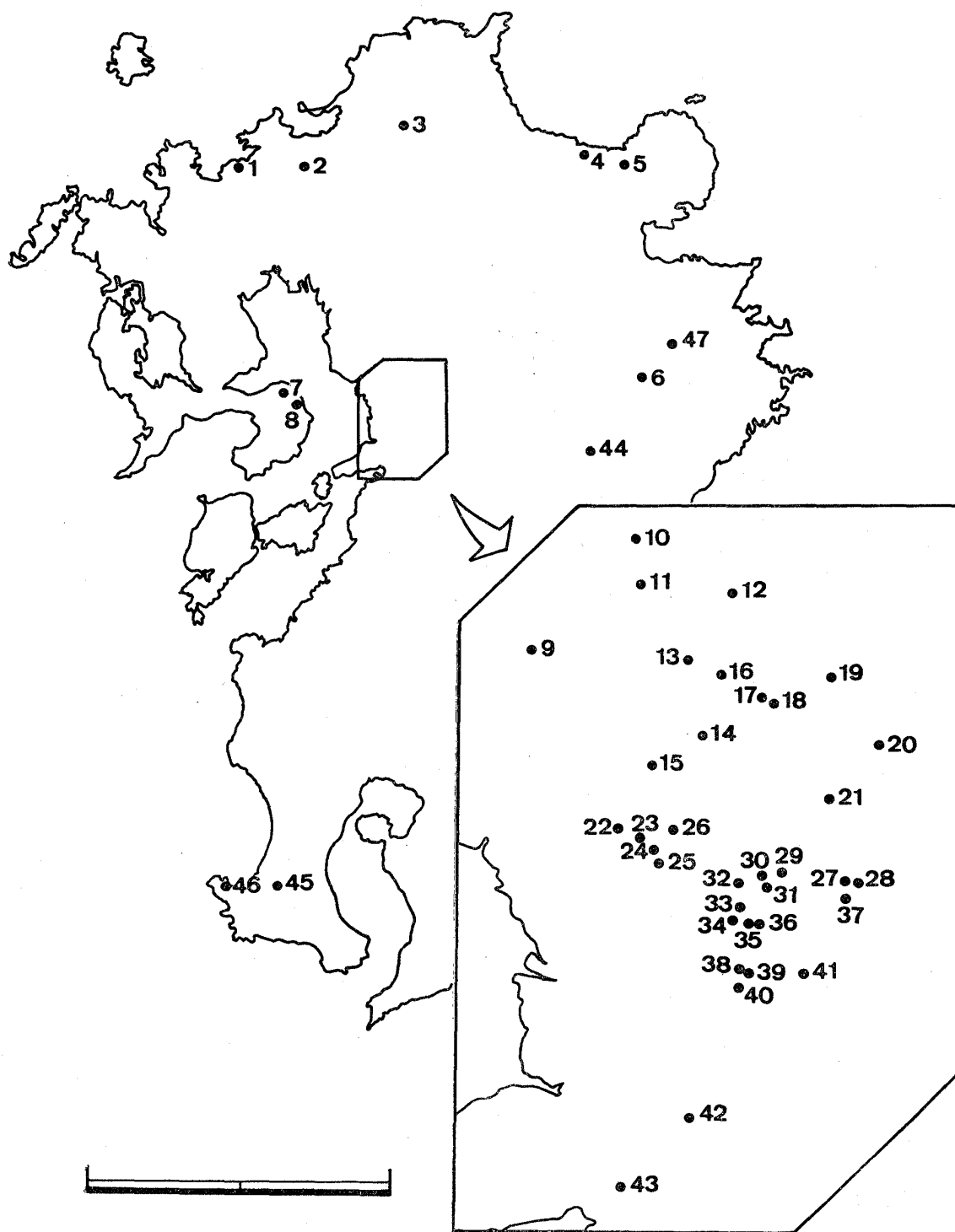


图1 九州地方人形・省略形土偶出土地图

縄文文化における結髪の特徴

——九州地方に分布する剃髪土偶の問題をめぐって——

尾 関 清 子

はじめに

五五四年に成立した『魏書』に「……其男子時時有_レ文_レ身、又有_二州胡_一、在_二馬韓之西海中大島上_一、其人差短小、言語不_二與_レ韓同皆髡頭如_二鮮卑……_一」^{註一} または、「……今辰韓人皆褊頭男女近_レ倭亦文_レ身使_二步戰_一兵仗與_レ馬韓*同、其俗行者祖逢、皆任讓_レ路……」^{註二}とありつまり「州胡が頭を剃って鮮卑のよう」とか、「馬韓は倭に近いので文身_{いれずみ}をする人が多い」といった意味が書かれてある。

筆者は本学紀要第二十号（昭和六十年七月）において、九州地方の縄文後期土偶について述べた。その中で、一部頭部形態に触れた際、ある著名な考古学者から九州の土偶は全部坊主であるとの教示を得ていたので、爾来、九州の土偶は俗にいう坊主頭であるといった先入感を持ち、かつ、前記魏書の内容に済州島の住民の中に剃髪した例のあることが記されているので、この風習が九州地方に伝播

した可能性が強いと想定し、いわゆる坊主頭の土偶の分布の有力な証左とした次第である。しかし、其の後さらに資料を綿密に検討した結果、従来、坊主頭と称されていた土偶の多くに、結髪またはそれを暗示する線刻等のあることが確認され一部前掲拙稿の内容に修正を加える必要がでた。

主として九州地方の土偶といえば、現在のところ出土地の大半は熊本地方に集中していることから、^{かみなべ}上南部、^{しんなべ}新南部、^{みまんだ}三万田、^{たろうさこ}太郎迫の諸遺跡出土の二七例を実査したが、それ以外に文献によるものが二九例あり、計五六例の土偶の特徴と結髪の有無を再検討することにした。

縄文時代の採集経済の中では、豊かな山野と資源の豊富な海や河川に恵まれた場所を住居に選んだことは当然といえよう。衣生活、住生活共に寒冷地帯より温暖の地が住み易いし、食生活にしても鳥や獣類だけでなく、さらに水産資源が加われば、野獣の保存食が底をつく頃になると、魚貝類の収獲でかなりの量の動物性タンパク質